

【研究報告書】

次世代につなぐ青少年活動

～青少年団体活動の歴史をふりかえり、これからを模索する～

2017 年度(公財)兵庫県青少年本部補助事業

2018年3月

兵庫県青少年団体連絡協議会 調査研究室

【目 次】

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	1
今日までの、兵庫県青少年団体連絡協議会・・・・・・・・	2
青少年団体と活動の歴史・・・・・・・・	3～12
青少年団体の誕生、そしてこれまで・・・・・・・・	13～28
次世代へつなぐ青少年活動・・・・・・・・	29～30
年表でみる、兵庫の青少年団体のあゆみ・・・・・・・・	31～34
委員会日誌 ～ヒアリング報告・開催経過～・・・・・・・・	35～39
これまでの調査研究活動 2017 年度 研究委員名簿・・・・・・・・	40

はじめに

2017 年度は「青少年団体活動の歴史を振り返り、これからを模索する」ことをテーマに研究室の活動を実施しました。

過去を調べる中で、各団体発足時の社会情勢や環境、時代の要請によって組織された団体など背景が鮮明になってきました。

また、社会の変化に伴った団体の活動内容の変化や行政等からの要請や事業内容の移り変わりなども見えて来ました。

これらの研究を基に、これからを模索し、次世代への提言としたいと思います。

2018 年 3 月 兵庫県青少年団体連絡協議会

兵庫県青少年団体連絡協議会（青団連）

昭和 42(1967) 年に兵庫県内で活動する青少年団体 23 団体で発足しました。

初代役員には会長、神戸 YMCA 総主事今井静雄氏、副会長には O A A (野外活動協会) 事務局長前田薫氏とボーイスカウト兵庫連盟理事長の高木正徳氏が就任、加盟団体の自主性、主体性を尊重しながら相互に連携し、健全な青少年の育成を目指してスタートしました。

この年は、団塊の世代が成人を迎えた最初の年で、大学進学率がまだ 2 割に満たなく、若者の大半は勤労者で、社会の中で大きな役割を果たしていました。一方、地方から多くの青年が集団就職で都市に移動することにより、勤労青少年を取り巻く社会問題、課題が顕著になり、その取り組みも期待されました。

青団連は兵庫県と共に、戸隠キャンプ、若人の祭典、海外青年受け入れ事業などを実施、昭和 59(1984) 年には幹事会を設置し、これからの青少年団体や協議会としてのあり方、また活動について継続的に、また定例的に検討する機会を持ちました。さらに、兵庫県青少年局からの事業企画や研修会、研究事業などにも積極的に取り組みました。

平成 9(1997) 年、神戸 YMCA 総主事山口徹氏が会長に就任、O A A (野外活動協会) 事務局長清水勲夫、兵庫県子ども会連合会事務局長速水順一郎両氏の副会長と共に、組織と活動の検討を行い、加盟団体の負担金(会費)で運営することや、青団連への関わり方を、常に運営に関わる団体、団体の趣旨に関係した内容について関わる団体、情報提供のみを受ける団体の三種から選択し登録することとし、毎月 1 回の運営委員会を開催するようにもなりました。また、(公財)兵庫県青少年本部との定期的な懇談会を持つことも始めました。

平成 24(2012) 年より兵庫県青少年本部の委託を受け、研究事業を実施、兵庫県青少年本部との共催、協力による指導者養成事業、青少年活動フェスティバル、青少年社会貢献活動認定事業、ふるさとづくり青年隊事業なども実施しています。

〈2017 年度加盟団体 23 団体 順不同〉

兵庫県連合青年団	一般社団法人 兵庫県子ども会連合会
日本ボーイスカウト兵庫連盟	一般社団法人 ガールスカウト兵庫県連盟
一般財団法人 O A A (野外活動協会)	兵庫県 B B S 連盟
兵庫県ユースホステル協会	一般社団法人神戸青年会議所
公益社団法人日本青年会議所近畿地区	兵庫県スポーツ少年団
兵庫ブロック協議会	兵庫県青年国際交流機構(IYE0)
兵庫県商工会青年部連合会	公益財団法人 神戸 YMCA
公益財団法人 神戸 YWCA	一般社団法人 神戸フットボールクラブ
兵庫県青年洋上大学同窓会	一般財団法人 兵庫県少林寺拳法連盟
兵庫県緑の少年団連盟	兵庫県モラロジー青少年団体連絡協議会
兵庫県世界青年友の会	一般社団法人 神戸国際支縁機構
NPO 法人 生涯学習サポート兵庫	一般社団法人 いえしま自然体験協会

□ 青少年団体と活動の歴史

現在の子ども会や青年団の前身は歴史的にも随分さかのぼった時代にあります。地域はコミュニティを形成し、相互扶助や地域共同体としての機能を持っていました。その時には青年世代の組織が大きな役割を担い、子どもも少年組等の名称で役割を担っていました。

【明治・大正、昭和 21(1946) 年、この頃までに既に活動をスタートさせていた青少年団体】

ここでは、第 2 次世界大戦以前に組織されていた青少年団体を取り上げ、その活動の概要をまとめてみました。情報は、団体発行の記念誌やホームページからも引用しています。

青年団

青年団のルーツは室町時代あるいはそれ以前までさかのぼると言われる。江戸時代には各村落ごとに若者組、若連中、若衆組などと呼ばれ、村落における祭礼行事や自警団的活動など村の生活組織と密着した自然発生的な集団だった。

明治～昭和前半

明治維新により、近代国家の建設と共に自給自足的な村落が解体する中で、伝統的な若者制度も消えていったが自由民権運動の影響を受ける世相で、山本滝之助が広島で青年会を起こす等、全国へ青年組織の結成が広まっていった。それらの組織は、大正時代には青年団および処女会（女子青年団）と称されるようになった。

終戦とともに今日の青年団が日本全国各地で結成される。昭和 20 年代の後半には約 400 万人と青年団人口はピークを迎える。また社会教育法の施行により、行政当局は青年団を社会教育関連団体として位置づける様になり、青年団の活動も社会教育的な面へのウェイトが大きくなった。

ボーイスカウト

明治 41(1908)年にボーイスカウト運動が日本に伝わる。駐ベルギー日本大使だった秋月左都夫が、英国のボーイスカウトについての情報を日本に報告。広島高等師範学校の校長だった北条時敬が、万国道德会議に出席のため、イギリス訪問の際にスカウト運動についての調査を行い、帰国後に広島などでスカウト運動に関する講演などを行った。大正 9(1920)年に第 1 回世界ジャンボリーがイギリスロンドンで開催され、日本から 3 名が参加した。

一方で当時の副理事長の三島道陽の妻の純らが中心となり「少年団日本連盟」の女子向け組織として「日本女子補導団」を設立。（後のガールスカウト）

また、大正 14(1925)年に第 1 回指導者訓練所を山中湖畔で開設。「ちかい(宣誓)」と「おきて」を制定した。

戦後の昭和 21(1946)年 2 月には三島通陽らがボーイスカウトクラブの研究会を開催し、12 月には民間情報教育局(CIE)が関東におけるボーイスカウト運動の再建を承認した。昭和 24(1949)年 4 月財団法人健志会を基にして財団設立認可が下り、「財団法人ボーイスカウト日本連盟」が発足した。

子ども会

子ども会の歴史は古く、子ども会という名称のもとに、大正時代に活動を始めたところもある。子ども会の源流は子供組であろう。いつごろからははっきりしないが、庶民階級の子どものおおよそ7歳から14歳ぐらいまでが仲間集団をつくっていた。この子ども集団は地域によって子供組、子供連中、子若連、天神講、トンド仲間、チゴ組、ドジ組、亥の子連中などと呼ばれていた。柳田国男は「子ども風土記」で、「・・・前代のいわゆる児童文化には、今とよっぽど違った点があった…」として、第一には「小学校などの年令別制度と比べて、年上の子どもが世話を焼く場合が多かった。彼らはこれによって自分たちの成長を意識し得たゆえ、悦んでその任務に服したのみならず、一方小さい方でも早くその仲間に加わろうとして意気込んでいた。この心理はもう衰えかけているが、これが古い日本の遊戯法を引継ぎやすく、また忘れ難くした一つの力であって、おかげでいろいろの珍しいものの伝わっていることをわれわれ大人も感謝する・・・」

第二には「小児の自治、かれらが自分で思い付き考えだした遊び方、物の名や歌ことばや慣行の中には、何ともいえないほど面白いものがいろいろあって、それを味わっていると浮世を忘れさせる・・・」

第三には「今日はあまり喜ばれぬ大人の真似、小児はその盛んな成長力から、ことのほか、これをすることに熱心であった。昔の大人は、自分も単純で隠しごとが少なく、じっと周囲に立って視つめていると、自然に小児の心持もわかるようなことばかりをしていた・・・。共同の仕事にはもとは青年の役が多く、以前の青年は殊に子どもから近かった。故に12～3才にもなると、子どもはもうそろそろ若者入りの支度をする。一方は、出来るだけ早く、そういう仕事は年下の者に渡そうとしたのである。今でも、九州や東北の田舎で年に一度の綱曳という行事などは、ちょうどこの子どもの遊びとの境目に立っている。もとは真面目な年占いの一つで、その勝ち負けの結果を気にかけるくせに、夜が更けてくると親爺まで出て曳くが、宵のうちは子どもに任せておいて、よほどの軽はずみでないと青年も手を出さない。村の鎮守の草相撲や盆の踊なども皆それで、だから児童はこれを自分たちの遊びと思い、後にはそのために、成人が後ろへ退いてしまうのである。(大人から子どもへ)」

YMCA

ジョージ・ウィリアムズにより産業革命下のロンドンで、1844年に活動スタート。当時、農村から都市に出てきた青少年たちは労働に追われ、人間性が阻害され、機械の歯車のように働かされ、仕事と寝るだけの生活を送っていた。その中で、自己の存在を豊かに感じることも得ることもできない孤立する青年たちのために祈りと活動を展開する。YMCAはその活動の広がり運動(Movement)と呼び、世界各国、それぞれのYMCAで展開している活動は、それこそMovementとなつて、人々の間に浸透していく。YMCAの使命(Mission)はその運動の根底にあり、運動を支える。日本YMCAにおけるミッションステートメント「日本YMCA基本原則」では、YMCAに関わる者の働きの基盤は、「イエス・キリスト」が示した愛と奉仕の生き方に学びつつ、世界的なYMCAのつながりを意識すること、としている。神戸YMCAは明治19(1886)年に発会した。

YWCA

YWCA は、イギリスでは産業革命、日本では明治維新という、大きな時代の変化の中で、女性たちの手によって生み出された。日本では、キリスト教女性信者たちが、世界 YWCA の支援を受け、明治 38(1905)年に創立、翌年には世界 YWCA に加盟した。

初期の活動は、若い女性の自立をめざし、学生を対象に進められた。明治 39(1906)年には青山女学院を会場に、第 1 回の修養会を開催。翌年には万国基督教学生連盟 (WSCF) のアジア初の大会が東京で開かれ、この大会に参加した世界的指導者が各地のキリスト教主義学校で講演や聖書研究会を行なった結果、学校 YWCA が全国に次々と結成された。

働く女性のサポート、女子労働者の問題は YWCA にとって常に関心の的だった。急速な工業化に伴い非人間的な状況で働かされていた女子工場労働者や農村の女性を支えるために、東京 YWCA はじめ、明治 43 年(1910)以降に誕生した横浜・大阪・京都・神戸 YWCA が、それぞれ活動を開始。中でも労働調査部による工場や農村の女性の実情調査は当時としては画期的なもので、ILO にも報告された。

平成 17(2005)年に 100 周年を迎えた日本 YWCA は、男女共同参画社会の推進、人権や健康や環境が守られる平和な世界の実現に向け、次の 100 年を見据え、今新たな一歩を踏み出す。『日本 YWCA100 年史 100 年のあゆみ—女性の自立をもとめて—1905~2005』は、日本の女性運動の歴史に新たなページを加える記録であり、キリスト教主義学校(ミッションスクール)の草創期の働きや社会福祉事業の歩み、女性を中心となった国際協力がもつ意義を知る上で、欠かせない著作となっている。

ガールスカウト

当時、イギリスで人気を高めていたボーイスカウト。その創始者、ロバート ベーデン・ポウエル (B-P) の前に突如、少女たちが押しかけ、「" Something for Girls, too!" (私たちも活動したい!)」と訴えた。それを聞いた B-P は、少女には少女に合ったやり方があり、運営は女性に任せるべきと考え、ガールスカウトをつくることにした。

1910 年ガールスカウトは正式に組織化される。後にガールスカウトを委ねられた B-P の妻オレブは、女性は男性と同等のパートナーであること、自信をもち、積極的に社会参画することを尊重していた。そして、少女たちの素質と才能を引き出し、社会に役立てるためのプログラムをつくり出していった。やがてガールスカウトはイギリス国内にとどまらず、少女と女性に力をつけることの大切さを世界中に広め、共感した世界中の女性たちに支持され、国際組織に変貌していく。大正 9(1920)年、イギリスから日本にも伝わり、全国各地に広がった活動は、第二次世界大戦中、一度の活動休止も、昭和 22(1947)年、戦後の焼け野原において、日本の未来を担う少女たちに力をつけること、明るい未来を見せることが重要、と考えた女性たちにより「誰の手を待つまでもなくわたしたちの手で」を合言葉に、ガールスカウト活動は再開される。その 2 年後、東京に「ガール・スカウト日本連盟」(日本支部・事務局)が正式に誕生。ガールスカウト活動再開の日、5 月 22 日を「ガールスカウトの日」とした。すべての少女と女性のためのムーブメントだった。

海洋少年団

大正 13(1924)年に油谷堅蔵海軍少将、小山武海軍少将、原道太海軍大佐らによって大日本東京海洋少年団が結成された。翌年、少年団日本連盟(現在のボーイスカウト日本連盟)に海洋部として加盟。昭和 3(1928)年、日本連盟規約改定で、加盟団はボーイスカウト・シースカウト(海洋少年団=海洋健児部)で、スカウトの掟を使わない少年団に分類された。

昭和 20(1945)年第二次世界大戦の激化に伴い一時解散。昭和 26(1951)年日本海洋少年団連盟を結成し、第 1 回全国大会を開催した。平成 6(1994)年に国際海洋少年団協会 (ISCA) が設立され、日本は加盟国となった(イギリス、ポーツマスで設立総会)。

(以下の 2 団体は、終戦後の混乱期の社会状況下に活動をスタートさせた。)

少林寺拳法

少林寺拳法の誕生、創始者・宗道臣(1911~1980)は昭和 20(1945)年、第二次世界大戦終戦後、戦争の結果として、荒廃してしまった日本の国土と国民の心をどのようにして立て直していくか、自分にできることはないかと悩んだ結果、「国の未来をつくるのは、それにふさわしい教育を受けた若者たちである」と思い定め、国家のあり方・人の道を、若者たちに説いて聞かせることから始めた。しかし、講釈ばかりの活動で、人が思ったほど興味を示さなかった状況に、宗道臣は思い悩み、深い悩みの中、ある夜の夢に菩提達磨(ぼだいだるま)が現れ、宗道臣が追いかけると、背中を見せて立ち去ってゆく、というものだった。

夢から覚めた後、かつて自分が中国で見た壁画、菩提達磨が考案したと伝えられる修行法を実践する僧侶の姿を描写したものと出会った。宗道臣は、国の未来をつくる若者の教育は、精神教育だけでは不足であると悟り、自身が身につけていた東洋の武術・武道をわかりやすく新たに体系づけ、拳技の修行を行う中で精神教育も施されていくという、身心一体の教育手段「少林寺拳法」を昭和 22(1947)年に考案するに至った。

BBS

今から 70 年前、日本の終戦直後の混乱期、町にあふれる孤児に若者の力で何かが出来ないかと考えた青年達がいた。その中の一人、京都の学生の投書が契機となって昭和 22(1947)年に「京都少年保護学生連盟」が生まれる。これが日本の BBS 運動のスタートと言われている。その頃に、大兄姉運動交歓会、京都少年保護学生連盟第一回創立総会が開かれる。京都女子専門学校(現在の京都女子学園)の一角に、BBS 運動発祥の地として記念碑が建立され、例年、会員有志は 2 月 22 日近くの休日に「記念碑の集い」を開き、先人たちの心に思いを馳せている。

現在日本の BBS は他の更生保護団体と力を合わせ、法務省の行う更生保護事業に協力するとともに、その働きかけの対象を広げ、非行を初め社会適応に悩む多くの少年少女に、同世代のいわば兄や姉のような存在として一緒に悩み、一緒に学び、一緒に楽しむボランティア活動を展開している。(BBS は Big Brothers & Sisters の略)

【昭和 21(1946) 年～40(1965) 年】

昭和 20(1945) 年の終戦以降、経済的、社会的混乱状況の中、昭和 21 年 10 月に、文部省は各地方担当あてに「青少年不良化防止対策要綱」を通達、終戦後の思想の低迷、経済活動の逼迫に伴う青少年犯罪の激増、悪性の度を加えつつある状況に、強く警鐘した。それには、児童生徒の住居地域を単位とした様々な活動が、地域の多様な大人たちの支援を得て、「郷土生活」の健全化が得られること。また、街頭における「愛護補導」の必要性等が示された。こうした動きや流れが後の子ども会結成につながっていく。

昭和 22(1947) 年 12 月、児童福祉法が公布、地域の児童福祉施設の設置が促進される。

昭和 24 年になると世の中もやや落ち着き、緊急の児童福祉対策から、一般児童の福祉にも目が向けられるようになり、また 6 月には「青少年問題対策協議会」を内閣に作り、関係各省と協力して青少年対策を推進する体制が取られるようになる。しかし、昭和 24 年は青少年の非行が増加した年で、児童福祉法の一部が改正され、少年法で取り扱われていた 14 歳未満の子どもは児童福祉法で、14 歳から 18 歳未満のぐ犯少年は福祉法と少年法の両者で取り扱うものとされるなど、制度が実態に追われる状況があった。

こうした状況下、中央児童福祉審議会は、これからの社会、国づくりの根幹の課題として、児童の健全な成長に大きな関心を向け、昭和 26(1951) 年 5 月 5 日に児童憲章を制定した。

〔『児童憲章』以下全文〕

われらは、日本国憲法の精神にしたがい、児童に対する正しい観念を確立し、すべての児童の幸福をはかるために、この憲章を定める。

児童は、人として尊ばれる。

児童は、社会の一員として重んぜられる。

児童は、よい環境の中で育てられる。

- 一、すべての児童は、心身ともに健やかに生まれ、育てられ、その生活を保障される。
- 二、すべての児童は、家庭で、正しい愛情と知識と技術をもつて育てられ、家庭に恵まれない児童には、これにかわる環境が与えられる。
- 三、すべての児童は、適当な栄養と住居と被服が与えられ、また、疾病と災害から守られる。
- 四、すべての児童は、個性と能力に応じて教育され、社会の一員としての責任を自主的に果たすように、導かれる。
- 五、すべての児童は、自然を愛し、科学と芸術を尊ぶように、導かれ、また、道徳的心情がつけかわれる。
- 六、すべての児童は、就学のみちを確保され、また、十分に整った教育の施設を用意される。
- 七、すべての児童は、職業指導を受ける機会が与えられる。
- 八、すべての児童は、その労働において、心身の発育が阻害されず、教育を受ける機会が失われず、また、児童としての生活がさまたげられないように、十分に保護される。
- 九、すべての児童は、よい遊び場と文化財を用意され、悪い環境から守られる。
- 十、すべての児童は、虐待・酷使・放任その他不当な取扱から守られる。あやまちをおかした児童は、適切に保護指導される。
- 十一、すべての児童は、身体が不自由な場合、または精神の機能が不十分な場合に、適切な治療と教育と保護が与えられる。
- 十二、すべての児童は、愛とまことによって結ばれ、よい国民として人類の平和と文化に貢献するように、導かれる。

この流れは、青年婦人を対象とした社会教育の充実、振興の一方で、少年期における学校外教育の重要性が示されることとなり、昭和 39(1964)年 4 月「全国少年団体指導者連絡協議会」は「全国子ども会連合会」と改称、社会教育における少年団体として発足するに至る。

神戸で、明治 19(1886)年、すでに活動をスタートさせていた神戸 YMCA は昭和 25(1950)年に余島キャンプ場を開設、海外でトレーニングを受けた専門指導者による組織キャンプを先駆的にスタート、野外活動体験を主とした青少年育成活動に取り組み、昭和 28(1953)年には全国初の肢体不自由児キャンプも開催している。

戦後、経済が本格的に復興し産業社会、都市化のくらしが進行していく中で、徐々にそのことがもたらす様々な出来事や問題が表面化していく。経済の高度成長が本格化する中、昭和 30 年代は第一次産業（農林水産業）から第二産業（加工製造業）への本格転換期ともなり、地方から都市部、また工業生産地への移住、とくに「集団就職」とも言われた社会現象、若年労働者の移動が始まる。兵庫県は沖縄、九州の西日本、四国からの流入者が多く、大手の事業所のみならず、商店街や町工場への就職、その多くは住み込みや寮生活を伴ったことだった。そうした事情に対し、大手の事業所が技術訓練学校を併設、技術面、生活面にわたって教育活動に取り組むことも稀ではなかった。ボーイスカウト連盟にも、昭和 30 年頃、こうした職域スカウト活動の取り組みがあったとされる。しかしながら、中には慣れない生活環境や人間関係に転退職を繰り返す若者も増え、一部が非行化、暴力団予備軍化していく事例も見られるようになる。この問題状況に、郷土振興調査会を構成する兵庫県、神戸市、商工会議所、神戸新聞社が提唱し、昭和 35(1960)年に発足したのが O A A（野外活動協会）だった。仲間作りと職場定着、そして良き先輩をめざす、これらをテーマとし、勤労青少年の育成、組織化活動に経営者らとともに取り組んだ。

昭和 39(1964)年の東京オリンピック、また日本の O E C D 加盟は、日本の高度経済成長の証ともなったが、同時に若者の自殺率が高まるなど、急速な都市化とともに、新たな青少年問題の発生、また深刻な公害問題などが社会問題化、深刻化しつつある頃でもあった。

若年勤労者への対策について、時期としては次項に入るが、昭和 45 年(1970)には勤労青少年福祉法が制定、職場に福祉推進員を配置するなど、若年労働者の福祉や職場定着に向けた取り組みがさらに促進される。7 月の第三土曜日を「勤労青少年の日」と定め、また全国の都市部には「勤労青少年ホーム」が設置されるなどした。

【昭和 41 (1966) 年～60 (1985) 年】

昭和 31 (1956) 年、第 10 回経済白書は「もはや戦後ではない」とし、昭和 35 (1960) 年 11 月池田勇人首相は「所得倍増計画」を打ち出す。昭和 39 (1964) 年には東京オリンピックが開催され、昭和 48 (1973) 年の第 1 次オイルショックまで 19 年間の高度経済成長を果たした。

昭和 40 年代の特徴は①モータリゼーションの進展に伴う事故の増加、②学生運動、学園紛争に関連した事件の増加、③シンナーなどの乱用の流行、④フーテンやヒッピーなど逃避型の逸脱行動の出現などがある。高度成長とそれに伴う急速な社会の変動は青少年を取り巻く社会環境や社会意識の大きな変化をもたらした。

青少年行政における総合調整機能の強化に向けて昭和 41 (1966) 年、総理府に青少年局が設置され、併せて同年青少年の健全育成の積極的推進のために青少年育成国民会議が結成された。この頃は、高度経済成長の下で青少年団体活動も活発に展開され、会員の増加や活動領域の拡大が見られた。また情報化、国際化が進展するに伴って、国際交流という新しい分野の青少年活動が生まれ、国際感覚豊かな青年が次第に増加していった。

兵庫県では昭和 43 (1968) 年に青年の国際交流を推進する兵庫県世界青年友の会が創立、また、昭和 46 (1971) 年には第 1 回兵庫県青年洋上大学がスタート、翌 47 年には兵庫県青年洋上大学同窓会が発足、また総理府主催の「世界青年の船」経験者で構成する兵庫県青年国際交流機構 (IYEO) が昭和 61 (1986) 年に誕生。こうした海外交流経験者がその経験を生かし、兵庫県内の国際交流や国際理解に向けた活動を積極的に展開した。これらの団体はその後、社会や地域のリーダーを育て、またその支援活動に大きく寄与していくことになる。

昭和 50 年代に入ると経済の高度成長は終わり安定成長の時代へと移行、人々の考え方も心の豊かさやゆとりのある生活を重視するように変化していった。核家族化、少子化、都市化などが進展した結果、家庭の孤立化が起こり、その教育機能の低下も顕著となった。また、学歴重視、受験競争の過熱などに伴い、人間関係が徐々に希薄化し、物質的には豊かになったなかで、青少年の育成環境はより困難な状況となり、校内暴力、家庭内暴力、いじめなど、問題は深刻していくことになる。

昭和 40 年から 60 年における金融資産非保有世帯比率は、ほぼ 5 %前後で推移、子どもたちを青少年団体活動などに参加させることのできる家庭が大半であった。しかし平成の時代に入るとその比率は次第に悪化、平成 28 (2016) 年には 30.9%にまでなり、そうした活動に子どもを参加させる余裕のない家庭が増加し、青少年団体活動低迷の一因とも考えられた。

【 昭和 60(1985)年～ 現在 】

〈 昭和 60 年～平成 3 年 〉

この年代の前半として、我が国が本格的に豊かな国となり、その後金余り大国と化し、さらにバブルがはじけて衰退する、平成 3 年までの数年間の状況について考察する。

昭和 61(1986)年、日本の GNP がアメリカに次ぎ世界第 2 位、世界のトップレベルに達し、成長の緩やかな上昇線を描き始めるとともに、いわゆる「一億総中流」が実現する。豊かさを享受し、人生は、あくせく生きるのではなく、のんびり生きるという志向が強まり、仕事よりも余暇、金よりも時間が大切とされ、「物の豊かさよりも心の豊かさ」というキャッチフレーズや「フリーター」という若者の生き方が現れた時期でもあった。

時代の変容は、子どもたちの遊びの変容をもたらした。子どもの遊びにおけるファミコンの出現は、「ブロック崩し」「インベーダーゲーム」という単純なものから、「ストリートファイター」シリーズ等の格闘技もの、「三国志」等の戦略もの、とまたたく間に多様性、複雑性を帯びるようになり、それに対応した子どもたちが、後にパソコン時代、ネット時代の大人に成長していく。

また、子どもたち自身の変化として、鉛筆の削れない子ども、朝シャンする女子高校生の出現、赤面恐怖などの「対人恐怖症」から、関係性の構築・維持のできない「ふれあい恐怖症」への変化など、仲間集団や対人関係にも変化が生じ、その変化の氷山の一角として出てきたのが不登校であり、ひきこもりであったと思われる。

青少年問題としては、子どもを叱ることのできない親、叱り方を知らない親、そして家庭のしつけの基準を喪失させた帰結として生まれた家庭内暴力、児童虐待が出現。学校関係の問題では、校内暴力、そしてその後に起こった「いじめ」問題への対応から「被害者の側に立つ」という教育スタンスが確立されていく。また、戦後直後の貧困と病気のために学校に行けなかった長期欠席児童とは違い、「子どもは学校に行くもの」という教育神話の崩壊により、新タイプの「不登校」の問題が生じる。さらに、高校中退、無職少年の問題、そして、対人関係が煩わしい、対人関係に恐怖を抱いている若者のひきこもり問題が生まれたのもこの頃からである。

このような諸課題に対応するために、民間の運動として「他人の子どもを叱る運動」や「雷おやじの会」の活動が全国的に展開された。また、国の政策・対策として、ポルノコミック規制、改正風営法に基づく少年指導委員制度の創設のほか、内閣総理大臣の諮問機関である「臨時教育審議会」が設置され、教育の荒廃という現状の改革と、21 世紀を見据えた教育の再構築をめざした審議・答申が出され、以後の教育行政に大きな影響を与えた。

兵庫県では、国際社会の発展に向けた青年の役割等の認識を高めるため、国連総会で定められた「国際青年年」(昭和 60 年)に、青少年育成兵庫県民会議と兵庫県青少年本部(任意団体)の機能を合わせ持った(財)兵庫県青少年本部が設立された。以後、国際青年年に因んだ「ともに生きる国際青年交流会議」の開催や「青年洋上大学」などの国際交流事業、青少年の広範な仲間づくりを促進する「ひょうごっ子きょうだいづくり運動」、地域での指導者の養成を図る「こころ豊かな人づくりきょうだいづくり運動」、地域での指導者養成を図る「こころ豊かな人づくり 500 人委員会事業」など、青少年の健全育成に向けた多彩な取り組みが展開された。

〈平成4年～現在〉

バブル崩壊により、大手銀行、大手証券会社の倒産、企業のリストラによる人員整理、若者の就職難、自殺の増大など、日本社会が泥沼に陥り、若者が人生を謳歌した時代が終わる。この時期に大きな災害・事件が3つ起きた。最初が平成7(1995)年の阪神・淡路大震災で、全国から若者がボランティアに馳せ参じたことを受け「ボランティア元年」という言葉が生み出された。2つ目が平成23(2011)年の東日本大震災であり、地震と津波が襲いかかる災害の恐ろしさを実感させられた。3つ目は、戦後最大の犯罪で最悪の無差別テロであるオウム教団の諸事件であり、社会全体に組織的な犯罪の怖さ、閉塞感が漂った。

このような中、青少年問題では、まず「青少年の就職・就労問題」が登場した。バブルの崩壊だけでなく、その対策として政府が打ち出した雇用規制の緩和政策により、契約社員、派遣社員、パート・アルバイトという「雇用の多様化」が進行し、日本の就業選択を安定化させていた新規学卒就職システムが崩壊しだし、高卒無業者という新たな青年層、さらに「ニート」とカテゴライズされる青年層を出現させていった。

学校関係でいえば、教育は家庭と地域と学校の三位一体で進めなければならないという理念のもと、平成14(2002)年に平成の教育大改革の一環として学校週5日制が導入された。また、「学級崩壊」の問題がクローズアップされた。以前の学級崩壊は、「校内暴力」や「荒れた学校」であり、主に中学校での現象であったが、それが小学校で、しかも暴力とは異質の「発達障害」等の問題として顕在化する。少年による「キレる暴力非行」「いきなり型非行」の凶悪事件も多発。高速バスジャック事件、豊川主婦殺害事件、神戸連続児童殺傷事件など、「青少年の心の闇」の問題といった特異な犯罪としてマスコミで報道され、親の子育て不安も増大した。兵庫県では、この状況に対し、昭和58(1983)年に制定した「兵庫県青少年憲章」を見直し、21世紀に青少年が大きく羽ばたくことを支援する基本方針として、「ひょうご青少年憲章」を新たに制定し、その普及啓発に努めた。また、その後に起こった池田小学校での殺人事件や登下校時の殺人事件は、青少年育成活動に大きな変化をもたらした。地域においては、青少年健全育成活動から、子どもを犯罪から守る安全・安心まちづくり活動へのシフトが進みはじめ、安全・安心まちづくりNPOの設立が活発化した。

この頃の特長的な青少年育成活動として取り組んだのが子どもの居場所づくりだった。子どもたちにとって「安心感を得るところ」「自分が必要とされているところ」である居場所を地域の大人が中心となつてつくろうという発想で全国に広がり、本県でも平成15(2003)年に、子どもの遊び場づくり、中高生の居場所づくりとして、「子どもの冒険ひろば」「若者ゆうゆう広場」事業がスタートした。

また、ここ数十年の間、目覚ましく進展したケータイ・スマホに代表される新しいメディアの出現は、テレビや新聞、雑誌といったこれまでのメディアにはない新しいタイプの「有害情報」「有害環境」をもたらした。このようなネット社会から子どもたちを守るため、法規制や自主規制などの環境づくりとともに、親の理解と子ども自らのメディアリテラシーを身に着けるための学習や啓発活動が、県民運動としても取り組まれた。

さらに、近年、ネット社会と対極にあるリアルな社会では、子どもたちの「ふるさとを大切にする心を養い、ふるさと意識を高める」取組や、子どもの実体験不足を憂慮し、体験がいかに大切であるかを啓発する運動が展開されている。

リアル社会での充実体験の積み重ねは、子供の健やかな成長を促すとともに、ネット依存等への対応策としても有効であると考えられる。

～ひょうご青少年憲章～

いま、私たちは暮らしや社会のあり方が大きく移り変わる転換の時代にあります。先の阪神・淡路大震災は、人と社会に何が必要なのかを改めて教えてくれました。

私たちは、これまでの自分の生き方を省みて人間生活の基本に立ち返り、自らを尊ぶと同時に、家庭や地域や国、そしてかけがえのない地球に生きる人間として、ひょうごの明日を担う青少年とともに、自信と夢と勇気をもって21世紀を築いていくことを誓い、この憲章を定めます。

- 一、自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていこう
- 二、ふれあいを深め、正義感をもち、社会を担う一人として生きていこう
- 三、人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていこう
- 四、多様な人々の存在を受け入れ、ともに支え合って生きていこう
- 五、自然を愛し、命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていこう
- 六、先人に学び、明日に夢をえがき、勇気をもって未来を拓いていこう

〈平成12（2000）年3月15日 制定〉

【青少年団体の誕生、そしてこれまで】

兵庫県下で現在、活動中の青少年団体を紹介します。それぞれの団体の設立の経緯や、当時の社会情勢等にもふれながら、どのような活動に取り組んできたか、そしてこれからどう展開していくかなど、団体から投稿してもらいました。

(一定期限までに、情報提供を受けた団体のみの掲載となっています。)

☆団体名：兵庫県農業青年クラブ連絡会議

◆団体設立の目的

兵庫県農業青年クラブ連絡会議の全身は、兵庫県4Hクラブで昭和24(1949)年に県下403単位クラブで男子8,286名、女子556名で顧問に岸田知事を理事長に神戸新聞社朝倉社長のもとで誕生。(4HはHead(頭脳)、Hand(技術)、Heart(心)、Health(健康)を指す)

当時は、農業はこれからの国や地域を担う重要な産業であり、その農産物の生産向上と農村生活の安定を目的として活動が行われた。作物は、つくれば売れる時代でもあり会員数も多かったが、昭和36年に農業基本法が定められて以降、農業から工業中心に時代が移り、農村から若者が減少、昭和38(1963)年には4Hクラブが解散。その当時残っていた若者たちの手で農業青年クラブが少人数であるが誕生、現在に至っている。

◆主な活動内容と歴史

農村青少年技術交換大会、農業青年フェスティバルの年2回の大会を柱として現在も活動を行なっている。そして近畿、全国と技術向上と仲間づくり進める中で年々参加人数が減少している状況に対し、オルグ活動で県役員が単位クラブに顔を出し、大会参加を呼びかけている。同世代、同業種の仲間の出会いの場でもあり、地域、また海外からの農業体験や実習生の受け入れ等も行っている。

◆今後の取組

マンネリ化も危惧される中、過去には青团連と繋がる事で、外部団体との交流から刺激を受け、青年達の視野を広げることが出来た。それまで農業を中心とする活動だったが、多様な若者やかたちの違う組織と出会う事で、内から外、外から内を見る目そして刺激を得たが、後継者育成も絡み、今後もそうした経験を出来るだけ生かし、自分達を高めていくことにつながる、また喜んでもらえる充実した大会運営を目指していきたい。

【兵庫県農業青年クラブ連絡会議は過去に、各地区の農業青年クラブの全県連絡協議会として青团連に加盟し活動しました。その後、退会しましたが活動を続けており、今日に至っています。】

☆団体名：一般社団法人兵庫県子ども会連合会

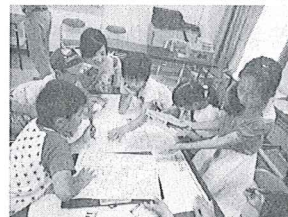
◆団体設立の目的

昭和 28(1953) 年 11 月に兵庫県社会福祉協議会の中に子ども分科会が設置され県子ども会が実質的な歩みを始めた。昭和 30(1955) 年には 1,262 の子ども会、101,482 名の会員、4,450 名の指導者を数えるに至った。この年、さらに子ども会の結成を目指し、促進会議の発足と巡回子ども会に取り組んだ。昭和 31(1956) 年 5 月兵庫県子供会連絡協議会設立総会を行い、本格的な歩みを始めた。

昭和 42(1967) 年児童を事故から守る運動を展開した。昭和 45(1970) 年子ども会活動中の事故による災害からお互いに助け合う子ども会共済事業を全国に先駆けスタートした。

◆主な活動内容と歴史

昭和 53(1978) 年には、青年の国際交流事業は展開されていたが、子どもを対象にした事業が民間団体の取り組みとしては少ない中、子どもの海外体験交流事業として「少年の翼」に取り組み、グアム島での海洋教室として実施した。この事業は 6 年目より交流先をシンガポールに変更し、アドベンチャースクールとして 30 回まで実施した。この事業の参加者から後の自然村づくりや冒険隊を指導する多くのリーダーが誕生した。また、シンガポールの青年や小学生が兵庫県にやってきて交流する事業にも発展している。昭和 58(1983) 年に 30 周年を迎え、「子ども自然村」づくり事業を 30 年後の完成を目指し、まずは無償での土地の提供者を募ることからスタート。雲をもつかむ思いで取り組んだ事業だが、10 か所の提供の申し出があり、出石郡但東町（現在の豊岡市）に決定した。ここで全国からジュニアリーダーが集まる 2 週間のトレーニングキャンプも実施（7 年間）した。平成元年には子ども自然村冒険隊事業を実施、子どもの目線に立って活動を展開することをねらいとし、米作り、無人島生活、雪中キャンプ、職業体験、名人に挑戦、建物に絵を描こう、野宿キャンプ、名産品や絶景を探そうなど様々なメニューを行った。これが子ども会活動へのメニューの提供にもつながっている。平成 5(1993) 年に 40 周年を迎え、この年より「地球に子どもたちの明るい笑顔を」事業で、物質的に恵まれている兵庫の子どもが、おやつ代を募金し、病気にかかった子どもや、食べるものや飲める水のない子どもにユニセフ等を通じて支援する取り組みを行った。平成 7(1995) 年阪神淡路大震災では、全国の子ども会関係者より多くの義捐金が寄せられ、お見舞いや子ども会の復興に活用した。平成 11(1999) 年では 45 周年と震災 4 年を記念し、丹波の森公苑に子ども会の森をつくるため、クヌギ 500 本の植樹を行った。50 周年を迎えた平成 15 年、2 回目の全国大会の開催と地元を歩こうと「兵庫県を踏破」事業を全県下で行い、子ども会から子ども会へたすきをリレーし大きな白地図に歩いた道をつないでいった。戦争を知らない世代が増えていく中、戦争の恐ろしさを知るとともに、原爆の恐ろしさも学習する「原爆ドームに折り鶴を」事業を展開した。平成 22(2010) 年度は、発達障害について指導者が学ぶ講座を行いました。平成 24(2012) 年度から一般社団法人兵庫県子ども会連合会として法人化しました。平成 25(2013) 年度には、60 周年を迎え記念誌の発行、第 1 回オセロ大会を開催。平成 26(2014) 年度には、防災ワークショップを開催し、意見集約した「子ども会でまなぼうさい！活動BOOK」を発刊しました。平成 27(2015) 年度には、地域の子ども会を活性化しようと、「育成者支援事業」がはじまりました。



◆今後の取組

市・町子連との連携強化に向けて、魅力ある子ども会をつくろうと子どもが健やかに育つまちづくりに向け、「未来の子ども会のかたちをつくろう！」プロジェクトを展開します。

☆団体名：日本ボーイスカウト兵庫連盟

◆団体設立の目的

ボーイスカウトは、1907年にイギリスのベーデン・パウエル卿がブラウンシー島に20人の少年を集めて実験キャンプを行ったことが始まりです。ベーデン・パウエル卿は「スカウティングフォアボーイズ」を著し、少年たちに仲間とともに自然の中で色々な事を学び成長するすべ(斥候術)を説きました。この「スカウティングフォアボーイズ」が全世界に広まっていったのです。

スカウトとは、「先駆者」のことで、ボーイスカウトとは「自ら率先して幸福な人生を切り開き、社会の発展の先頭に立とうとする少年」という意味を持っています。ボーイスカウト活動は、仲間たちと自然の中で遊びながら、いろいろなことを身につけて、より良き社会人を目指す活動です。具体的には、野外活動を通して、班の仲間とともに自然を学び、友情や協調の精神を育てるとともに、「ちかいとおきて」の実践を通じて奉仕活動を行っています。

◆主な活動内容と歴史

休日に集まって、工作やゲーム、歌、演劇などの活動、手旗やロープなどの練習、キャンプ生活の基本を勉強します。春休みや夏休みには長期キャンプがあります。スカウト活動の場の中心は野外活動(アウティング)です。自然の中で生き抜く力を学び、社会奉仕を通じて社会との係わりを学びます。ボーイスカウトの活動は、各年齢層に応じ5つの部門により構成されています。兵庫連盟は、昭和24(1949)年12月27日に連盟総会が開催され、翌年の昭和25(1950)年4月29日に神戸諏訪山金星台にて連盟結成式が行われました。平成30(2018)年度は、68周年になります。

● ビーバースカウト 「小学校入学直前の1月～小学校2年生」

自然に触れて遊ぶなかで色々なルールを学んでいく。木の葉章を集めて小枝章獲得を目指す。

● カブスカウト 「小学校3年生4月～小学校5年生」

各学年を取り混ぜて6～8名の組を作り、年長の組長を中心とした活動を行い、うさぎからしか・くまへと進級していく中で、リーダーシップを養っていきます。

● ボーイスカウト 「小学校6年生4月～中学校3年生」

各学年を取り混ぜた8名程度の班を作り、班長を中心に班の仲間たちで考えながら活動することを学びます。初級→2級→1級→菊への進級を目指します。また、自分の興味のある技能章を修得することを通じて、人格、健康、技能、奉仕の精神を習得します。

● ベンチャースカウト 「中学校3年生9月～18歳まで」

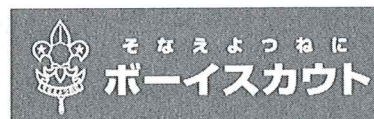
各人の目標に向かってアワードを取得するプロジェクトを仲間と話しあい行う。アワードと技能章の修得により、隼～富士へと進級します。

● ローバースカウト 「18歳以上～25歳まで」

自分たちのニーズにあわせた色々なプロジェクトを実行していく。また、各部門のサブリーダーとして奉仕することも大きな柱となる。

◆今後の取組

モットー「そなえよつねに」、スローガン「日日の善行」、を実践しながら、次代の青少年の育成に向けて「なろう。一人前に。」キャンペーンを展開し、加盟員を増やしていきます。



☆団体名：一般社団法人ガールスカウト兵庫県連盟

◆団体設立の目的

ガールスカウト運動はイギリスから始まったボーイスカウトの集会に7人の少女が参加したことから始まり、少女には女性の指導者をと創始者ロバートベーデンポウエル氏の考えの元、少女と若い女性の幸福と平和のために、責任ある市民として自ら考え、行動できる人となるようにする、社会に貢献できる女性を育てる事を目的としています。現在の活動においては「やくそく」と8つのおきてを基本としています。

◆主な活動内容と歴史

兵庫県では、昭和23(1948)年12月にリーダースクラブ(会長・大日千恵子)の発足、翌年1月に米ガールスカウトミセス・コーキンスをお招きし、お米・毛布持参での指導者養成研修会が実質の活動の始まりでした。その後リーダーの結婚などから団運営が行き詰まるなど、低迷した時期もありましたが、組織の拡充、スカウトの活発な活動などにより昭和36(1961)年11月23日には全国第12番目の支部として兵庫県支部が発足しました。17ヶ団400名の会員が集まり記念式典が行われました。その後、支部の組織も整備され、「支部だより」(現在では連盟だよりとなっています)という機関紙の発刊、各団での集会や野外活動なども活発になってきました。昭和41年日本で開催された19回世界会議での「創始者のスカウティングの理念を忘れてはならないが、時代に即した新しい道を見出し、現代の少女に必要なものを与え、社会の進歩と原動力が必要」との提案に基づき「団制度及びプログラムの改正」が行われ、テンダーフット(就学前1年)ブラウニー(小学1~3年)ジュニア(小学4年~6年)シニア(中学生)レンジャー(高校生)の各部門を一つの団として活動、現在に至っています。平成24(2012)年には法人化され、一般社団法人ガールスカウト兵庫県連盟となりました。

国際交流では、昭和32(1957)年より世界各国に延べ約450名のスカウト・リーダーが派遣されました。登録会員数は順調に拡大していましたが、残念ながら、昭和63(1988)年76ヶ団、5,284名をピークに減少を続け、平成29(2017)年現在46ヶ団、1,430名となりました。



◆今後の取組

活動を取り巻く環境は大きく変化し、価値観の多様化、少子高齢化等、誠に厳しいものがあります。しかしながら、活動の使命「自分と他の人々の幸福と平和のために責任ある市民として自ら考え行動できる少女と若い女性を育てる」は不変です。

現在のプログラムでは Be the CHANGE ~私が変わる。未来が変わる~をもととして VAV(voices against violence)みんなで作る差別と暴力のない世界。又 FBM(free being me)大好きなわたし等 自分自身に自信を持ち、自分が大切な存在であることを認めることをできる心(自己肯定感)を育てると同時に、また他者を認める心を養うことを培っています。2020年にはガールスカウト日本連盟は結成100周年を迎えます。これに伴い、100万人とつながるキャンペーンやCAC(コミュニティアクションチャレンジ=少女と女性の視点に立ったコミュニティに変化をもたらす)プログラムにもチャレンジして、これからも「自分で考え、行動できる女性」がその可能性を最大限に発揮できる社会環境を作り上げていくことに挑戦してまいります。

☆団体名： 一般財団法人 野外活動協会(OAA)

◆団体設立の目的

OAA活動は昭和35(1960)年にスタート、昭和41(1966)年には兵庫県知事を理事長として財団法人化された。高度成長期、地方から若者たちが都市部、兵庫県に、いわゆる集団就職といった社会状況の時代で、繊維、化学から造船、鉄鋼さらには住み込みで働く商店従業員。彼らは「金の卵」、次代の担い手として、大きな期待を受けていた。

しかしながら新しい生活環境、慣れない人間関係、仕事や職場に馴染めず離職し、転職を繰り返す者、中には非行化し暴力団予備軍化する事例も多く見られた。この状況下、兵庫県、神戸市、商工会議所、神戸新聞社等が提唱、事業所と協力し勤労青少年の育成、定着を願い、良い仲間作りを目指し、OAAを設立。レクリエーションや野外活動を通じたグループ活動を当時、事業所では「OAA活動」と呼び、指導者育成を伴ったこれらの職場づくり活動を本格的にスタートさせた。

(O-Outdoor、A-Activities、A-Association)

◆主な活動内容と歴史

当時のスローガンは「よい喜びとよい仲間、新しいくらし、明るい職場、明日の日本を」プログラムは楽しく魅力的に、その成果は自らのくらしや将来に向けて、さらにより良い職場、社会作りを、といった展望のもと、社会人教育(新人、先輩育成)や会員活動(野外活動、趣味講座等)を展開。昭和43(1968)年にはOAA会館としての「はりまハイツ」を建設。職場の仲間作り、魅力ある職場づくりへの取り組みを本格化させた。その後、生涯学習社会の到来、少子高齢長寿社会へと社会ニーズの変化から、地域づくりや地域の青少年育成にも積極的に関わるようになった。会員(社会人、ファミリー)を対象とした野外活動も常時実施している。

◆今後の取組

OAAの強みはゲレンデ(施設)、プログラム(活動・実践ノウハウ)、リーダーシップ(指導者・人財)を有すること。しかし、それらは今や再整備、検証そして開発が急務である。今日、職域また地域における青少年の福祉(保護・育成)を阻害する要因は複雑に入り組んでいる。関係機関や団体、組織との協働無しに、また相当な準備や鍛練無しに、成果は得られにくくなっている。青少年を対象とする活動であるからこそ、どんな未来社会を予想し備えようとしているか、何を価値あるもの、大切なものとして考えているのか等を、団体として明らかにし、魅力あるプログラム、リーダーシップを通して発信し続けることが、常に求められていると考えている。



OAAはりまハイツ(加古川市日岡山公園)



蓼科登山 会員ハイク

☆団体名：兵庫県ユースホステル協会

◆団体設立の目的

ユースホステルの発祥は、ドイツで 1912 年に「あらゆる国の青少年のだれもが、人種、国籍、皮膚の色、宗教、階級、ならびに政治的信条による差別をしないホステル（宿泊施設）を提供する事」を目的に設立されました。

わが国では、昭和 26(1951)年に「青少年が自力による簡素な野外旅行活動によって、国内外の地理、風物、文化、歴史、及び産業等各方面の知識を広め、規律あるグループ活動及び日常生活の良習慣を体得に必要な教養の場としてホステルを設置管理し、青少年を育成する事」を目的に設立されました。

◆主な活動内容と歴史

兵庫県では、昭和 32(1957)年 3 月、阪本勝知事(当時)の発案により設立され、昭和 35(1960)年 6 月に芦屋 YH、昭和 36(1961)年 4 月に淡路 YH の公営(県立) YH が完成しました。

事業では昭和 32(1957)年 8 月に第 1 回ユースラリーを雪彦山 YH で、昭和 33(1958)年 4 月にユースホステルアジア協議会が神戸で開催され、同時に宝塚で西日本ユースラリーが開催されました。昭和 35(1960)年 8 月に宝塚で第 1 回全日本ユースラリーが開催され全国から多くの若者が参加しました。

昭和 45(1970)年には第 1 回オリエンテーリング大会を青野ヶ原で開催し、兵庫県オリエンテーリング協会の設立に寄与しました。

昭和 53(1978)年から平成 7(1995)年まで、少年少女自然体験活動「グリーンスクール」として、春(ホステリング)、夏(キャンプ、ヨット教室)、秋(ホステリング)、冬(スキー)にスクールを開催、多くの子どもが参加しました。

平成 8(1996)年からは国内外の地理、文化、歴史などの知識の習得に「歴史ハイク」を開催し、現在も継続している行事の一つです。

平成 10(1998)年から武庫川女子大学ユースホステル部、平成 14(2002)年から神戸女子大学ユースホステル部における「少年少女キャンプ」の支援も行い、青少年育成事業として現在も続いています。

◆今後の取組

「可愛い子には旅をさせよ」という諺も死語に近くなってきた今日、旅は、今日の社会生活における非自然的、非人間的な生活から自己を取り戻し、自らを築き上げていくための生活内容の一部と解するならば、自らが計画し、自らの力で行う旅をする事。旅の魅力は、未知なものへのあこがれであり、日常の生活からの脱出であり、自然への回帰であり、自我の発見への期待であり、何ものかとの「出会い」への願いが込められていると思います。

ユースホステル協会では、こうした旅を行う人たちへの支援や相談を行っています。国内外を問わず相談に応じております。新しい出会いを求めて旅に出てみませんか。

☆団体名：兵庫県スポーツ少年団

◆団体設立の目的

日本スポーツ少年団が、1962(昭和37)年に誕生した1年後に、「兵庫県スポーツ少年団」は、登録団14団、登録団員388名で、その歴史をスタートさせることとなった。初代本部長には、兵庫県教育委員会事務局体育保健課長(当時)の 常松 喬 が就任した。

◆主な活動内容と歴史

国際交流事業では、「日独スポーツ少年団同時交流事業」として昭和49(1974)年に、第1回の派遣・受入を実施した。以後今日まで、指導者・団員の派遣・受入を実施している。

全国競技別交流大会の開始に伴い、昭和54(1979)年度に、県競技別交歓大会が開催されるようになった。昭和56(1981)年度からは、近畿ブロック競技別交流大会も開催され、第1回大会では剣道競技を本県で開催した。各競技別交流大会が盛んになる中、県スポーツ少年団総合競技大会の開催が決定され、第1回大会が平成3(1991)年、県立総合体育館に於いて総合開会式を行い、同体育館及び近隣の学校施設で、7競技の競技会を実施した。現在は、サッカー、バレーボール、軟式野球、剣道、柔道、空手道、ソフトボール、バドミントンの8競技の競技会を実施している。平成11(1999)年に全国競技別交流大会を剣道競技で開催した。阪神・淡路大震災からの復興を視野に入れて開催し、地元赤穂市チームが準優勝に輝き、大会は大いに盛り上がった。また、前回大会の開催から12年という短い期間であったが、平成23(2011)年にも剣道競技で開催を表明していた。県立武道館を会場とし、準備を進めていたが、東日本大震災(3.11)の発生により大会は中止となった。一方、競技大会とは別に、野外活動を含めたスポーツの交流大会としての県スポーツ少年大会は、昭和41(1966)年に、第1回大会を開催している。以後、自然の家・青年の家・野外活動センターといった社会教育施設を中心に、毎年7～8月に開催している。昭和44(1969)年からは、近畿スポーツ少年大会を開催しており、毎年、指導者、リーダー、団員を派遣している。6年に一度主管を担当するため、県スポーツ少年大会と兼ねて開催している。

全国スポーツ少年大会には、毎年、指導者・団員を派遣している。平成8(1996)年に本県で開催する予定であったが、阪神淡路大震災の発生により開催困難となり、京都府が代替開催している。指導者養成・リーダー育成の推進として、登録指導者の相互の連携・資質向上を図るため、昭和51(1976)年に県スポーツ少年団指導者協議会を組織した。さらに昭和59(1984)年からは、指導者協議会から代表者が本部役員に就任するようになり、指導者の位置づけが重要視されるようになった。全国剣道交流大会において、本県団員が運営補助員として活躍したことを契機として、平成12(2000)年、県リーダー会を組織し、活動を開始することとなった。平成25(2013)年からは指導者協議会とリーダー会をつなぐ組織として、リーダー育成委員会が誕生した。

◆今後の取組

最重要課題は、本県設置市町、登録団の拡大である。設置市町について平成29(2017)年現在、県内41市町のうち32市町の設置があり、設置率は78%である。創設以来順調に登録数を伸ばしてきたが、昭和50(1975)年代初めの有料登録制の導入で、大幅に登録数を減らした。

(昭和50:26,358人→昭和51:7,927人)その後、徐々に登録数を増やしてきたが近年は、ほぼ横ばいである。少子化が進んでいるとはいえ、スポーツ少年団に登録していない子どもたちはたくさんおり、いかにその魅力を広報し、登録を促進していくかが課題である。(平成29:10,506人)

☆団体名：神戸YMCA

◆団体設立の目的

明治初期(1886年)日本が急速に欧米の資本主義的近代社会に参加する過程でその精神的基盤としてのキリスト教を中心とする思想、文化の担い手として活動が開始された。神戸におけるキリスト教の大本山と呼ばれたが、教会の布教活動とは異なり、信徒運動が特徴でありながら、広く地域に開かれた西欧文化、スポーツ、思想の窓口であった。

(YMCAの創設については本冊子、4頁参照)

◆主な活動内容と歴史

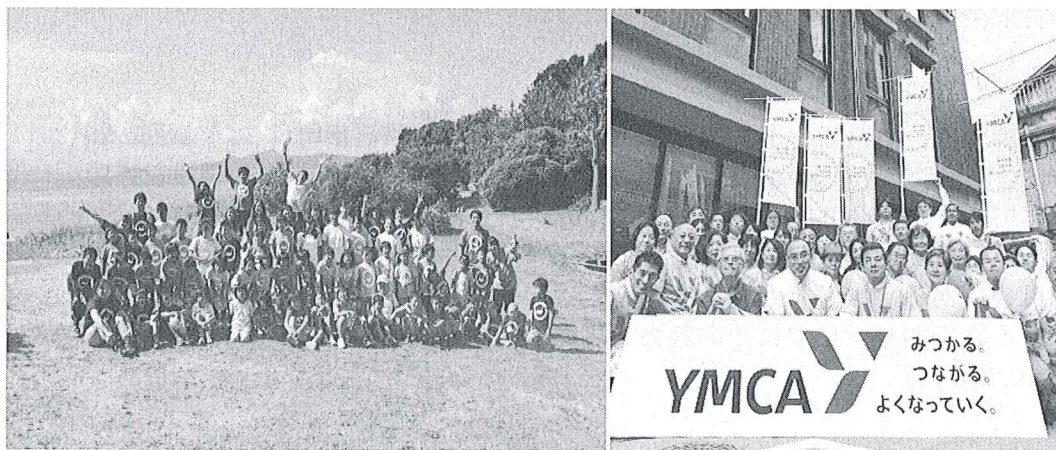
プログラム活動のスタート(活動の実際)、英語学校がプログラムのスタートであったが、当時の学生にとって語学の習得のみならず、西欧文化・思想の窓口、さらには学生同士のコミュニティが形成されることになった。ついで寄宿舎事業、バスケットボールの紹介、アインシュタインの講演会等のプログラムに展開してゆく。つまり、当初からプログラムは目的であったが、結果的には手段化されてゆき、一種の開かれた会員活動の性格を強く持っていたと言えるだろう。

◆今後の取組

本格的な活動のための苦労や取組み、また課題となったこと。130年の歴史の中で財政基盤を確立した上で運営が出来たことはほんの20年(1970～90)ほどで、あとは常に乏しい財政のなかでのやりくりであった。また、先進的な取組みは常に地域や会員の課題解決の模索から始まったといえる(余島キャンプ、肢体不自由児キャンプ、西神戸YMCA、学習障害児クラス等)。これらに共通するのは

- ① 地域あるいは会員ネットワークからの課題の抽出
- ② 訓練されたボランティアリーダーシップとそれを支えるユースワーカーの存在
- ③ プログラムの受益者⇒ユースボランティア⇒保護者として子どもをプログラム参加者へ⇒YMCAの担い手会員⇒ボランティア役員

上記①②③が相まって受益者が奉仕者、提供者へと変換してゆくサイクルがYMCAの最も大きな特徴といえるものである。



◆団体設立の目的

YWCAが産声をあげたのは、1855年（安政2年）ロンドンである。産業革命のただなか、職業をもつ女性が増え、また職を求めて多くの若い女性たちが農村から都会に出て来るようになっていた。生活が急激に変化する中で、神の前に静まるときをもとうと祈禱会を始めたエマ・ロバーツと、農村から出て来た女性たちのために寄宿舎をつくったメアリー・キナード。この2人が出会い協働することで、YWCAがスタートした。

日本においては1905年（明治38年）にYWCAが創設された。東京、横浜、大阪と続き、1920年（大正9年）に神戸YWCAが誕生した。創立から9年間（昭和4年まで）は、会員からの借家を用いていたと記録にある。

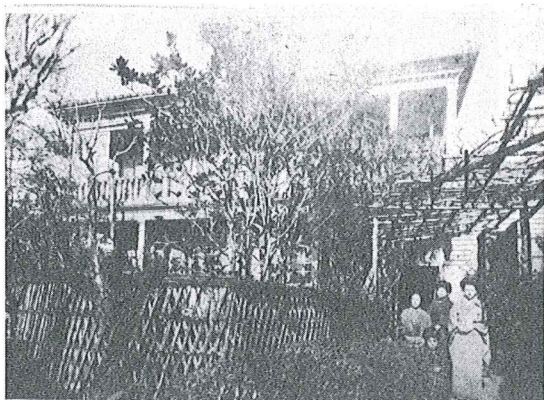
◆主な活動と歴史

神戸YWCAのミッション（目的）は、キリスト教の基盤に立って、青少年及び女性が成長し、協働していくことを通して、平和と正義の実現に寄与することである。創立年11月の活動記録には、英語、西洋料理、裁縫、音楽、聖書の組などの教育事業が行われていたこと、専門の職業を有する婦人方のクラブをつくろうと計画していたこと、そして移民として南米に渡航する女性たちに外国の風習、英語、移民に関する法律等の講習を行っていた事が記録されている。これらの活動は、すべてボランタリーな会員たちによって行われており、会員たちの問題意識と意欲から社会貢献事業が生まれていく、そのありがたは、いまでも神戸YWCAの基盤となっている。

ほぼ教育事業を中心に活動が進められていた神戸YWCAにとって、大きな転機となったのは1995年の阪神淡路大震災であった。被災地の直中にあった旧会館は、多くの地域住民の方々の避難所となり、救援活動の渦の中に投げ込まれた。そこから始まった炊き出しや見守り活動が、現在も、地域の高齢者への配食活動、夜回りなどの活動として継続されている。

◆今後の取組

神戸YWCAは2020年に100周年を迎えようとしている。会員減、財政難という待ったなしの現況の中、事業と財政の再評価と新しい仕組みづくりが求められている。今の時代の中でいかに神戸YWCAのミッションを果たしていくか。人が人と出会うことで自らに出会い、自らの成長を願う心の熱に導かれて、社会課題に仲間と共にとくみあっていくことの醍醐味は、いまでも求められていることだと信じ、変化を恐れず取り組んでいきたい。



1929年まで使用された中山手会館



英語科の女性たち(1926年)

☆団体名：兵庫県青年洋上大学同窓会

◆団体設立の目的

昭和 40(1965)年代に入り、国においては、昭和 41(1966)年、総理府に青少年問題審議会、青少年局が設置され、同年、青少年育成国民会議が結成される中、青少年のニーズに即した、青年の船事業や青年海外協力隊事業等が開始された。

昭和 46(1971)年、兵庫県では、全国で初めて地方自治体が主催する海外研修船として「第 1 回兵庫県青年洋上大学」が実施され、その研修で学んだ“こころ”を土台に、参加した仲間が事後活動の場として、地域社会に還元し、かつ会員相互の交流を図ろうと、昭和 47(1972)年 5 月 28 日に、「兵庫県青年洋上大学同窓会」を設立。

◆主な活動内容と歴史

今では、兵庫県青年洋上大学、近畿青年洋上大学、勤労青年洋上大学、海外養成塾等の参加者を含め、会員数は約 1 万人を数える団体に成長・発展してきました。活動としては、県下 7 地区（神戸、阪神、東播磨、西播磨、但馬、丹波、淡路）と本部事務局で、同窓会自主事業・社会貢献事業として、キャンプやセミナー、マラソンボランティア参加、国際交流事業等種々な取り組みを行ない、体験を通して指導者育成に努めているところです。

しかし、私達の活動を振り返ってみますと、社会ニーズの変化により、色々な変遷を経て今にきていることは言うまでもありません。

活動面では、新規会員となる洋上大学の参加者数の減少、洋上大学が隔年実施となったことなど活動への環境が大きく変ったこと。また、洋上大学同窓会は、任意団体のために様々なご要望に対応出来ず、十分な連絡調整が取れなかったこと。そして、会員構成の年齢層も幅が広く、各年齢層を対象とした事業が必要であったこと。ホームページ等で発信はしているものの、その状況は大変厳しく、広報面の検討の必要があったこと。……など、組織の活性化、事業への取り組み面で課題が多くあり、その課題への改善を求められました。

そのため、歴代会長及び顧問、関係者を主とした検討委員会を開催するなど、会の在るべき姿を見直し、今抱えている問題点の対応に取り組んできました。

その一つとして、会員の増強面においては、賛助会員制度を導入し会の活性化に努め、情報発信においては、会のホームページの充実に務めるとともに、会の役員間等の連絡関係においては、PC メール等により情報を共有し連携を図って来ました。

◆今後の取組み

今一度原点を振り返り、地域活動の担い手となっているか等、今後の会の姿を考えながら、①機会の提供により、企画・調整力のある会員づくり。②組織における役割分担の徹底。③同窓会事業の再構築等、県及び青少年団体等の連携を図り、各年齢層に応じた事業を実施し、地域の活動に参加出来るよう、会員相互の交流を通して活動を推進して行いたいと思います。



… まだまだ？ 仲間が集まれば…何かが出来る！！ …

☆団体名:兵庫県緑の少年団連盟

◆団体設立の目的と経緯

次代を担う子ども達が、活動を通じて自然を愛し、人を愛し、自ら社会を愛する心豊かな人間に育つことを目的とし、子ども達の自主的な活動を主眼とした団体である「緑の少年団」の活動の充実強化を図る。

◆主な活動内容と歴史

(1) 主な活動

- ア 兵庫県緑の少年団活動発表会または兵庫県緑の少年団連盟指導者研修会の開催
- イ 緑の少年団への結成及び運営の助成、地区連絡協議会等の活動費の助成
- ウ 各種大会への参加 ひょうご森のまつり、緑の少年団全国大会・活動発表大会など



森林整備体験

(2) 歴史

昭和25(1950)年に「森林資源を造成し、環境を緑化し、文化日本の再建に資するため一大国民運動を展開する」ことを目的に、国土緑化推進委員会が設立され、荒廃した国土に緑を呼び起こす国民運動が全国規模で展開された。

昭和35年、国土緑化推進委員会が「グリーン・スカウト」の名称で緑化を実践する少年団の結成を呼びかける。昭和44(1969)年、秋田県から「緑の少年団の結成について」の提案があり、以後各県で緑の少年団が結成され団数も増加し成長していった。

昭和49(1974)年第25回全国植樹祭(岩手県)に緑の少年団が参加し、全国的に注目を集め、成長に拍車がかかる。兵庫県においても、昭和56(1981)年4月15日、第26回兵庫県緑化大会(宍粟市(旧 宍粟郡山崎町))の際に設立された。

学校や市町などの単位で結成されていることが多いが、市民団体が母体となっているところもある。平成2(1990)年、第1回緑の少年団全国大会(神河町(旧 大河内町)峰山高原において)の開催を契機として、「少年団活動の充実強化を図るための組織化」として県連盟を設立した。
(会長兵庫県知事、現在県内152団、団員7,433名)

◆今後の取組

緑の少年団は、学校教員、PTA、育成会、森林ボランティア団体、加えて森のインストラクターなどの協力のもと、以下の活動を進めている。県連盟として、活動をより積極的にサポートする取組みを検討していく。

- | | | |
|--------------------|---------------|--------------|
| ① 森林での学習活動 | ② 地域の社会奉仕活動 | ③ レクリエーション活動 |
| ・ 森林及び林業学習 | ・ 緑の募金活動 | ・ キャンプ |
| ・ 植物観察、植物採集 | ・ 植樹、森林の保育等 | ・ ハイキング ほか |
| ・ 野鳥観察、巣箱づくり | ・ 公共施設等の清掃 ほか | |
| ・ 緑化ポスター等の作成 | | |
| ・ 緑化行事(森のまつり)参加 ほか | | |

☆団体名：兵庫県モラロジー青少年団体連絡協議会

◆団体設立の目的

公益財団法人モラロジー研究所は、昭和元(1989)年に法学博士・廣池千九郎が創建した生涯学習・累代教育団体であり、新科学モラロジーの学習を深め、人類の安心平和幸福をめざす志を高め、様々な社会教育活動を通じて、具体的な社会貢献活動を展開してきました。

◆主な活動内容と歴史

財団法人が、公益と一般に分化したその年に、青少年本部と時を同じくして、いち早く公益の認定を受けたことは、記憶に新しいところであります。

平成10(1998)年、まなびピア兵庫『生涯学習フェスティバル』が開催され、生涯学習研究会議が企画されました。その折に『世代交流と生涯学習』というテーマの分科会を担当させていただきました。この会議で、各種団体の中での我が団体の立ち位置が明確になりました。

翌平成11(1999)年に、兵庫県の青年組織を、兵庫県モラロジー青少年団体連絡協議会と再編成し、その名称で、兵庫県青少年団体連絡協議会に加盟し、今日に至っています。

以来、永年各市町村で実施してきた、青年セミナー、合宿制二世連講、サマーキャンプなど団体の定番行事に加えて、県一本では、神戸新聞社と共催で、親の思いを伝えようキャンペーンを5年連続開催、その後は兵庫県青少年本部に絶大なご協力を賜り、「親へ思いを届けよう（現在：家族へ思いを届けよう）プロジェクト」を、学校の道德授業と連動しながら継続実施しております。

その間、全国各地の災害ボランティア、若者応援団の支援物資の供給、車椅子マラソンなど各種イベントのお手伝いなど、身の丈にあった活動をさせていただき、青少年の心に『利他の心』を醸成してきました。

◆今後の取組

今後も、行政、諸団体と心をつ結びつつ、社会の手で社会を良くする活動に邁進していきたいと念じています。



県政150年事業



県青年スタッフ



ふるさと塾合宿セミナー

☆団体名 : 兵庫県世界青年友の会

◆団体設立の目的

第2次世界大戦の終了後、各国は経済の復興に力を入れるとともに力強い国造りのために人材の育成に注力しました。特に平和の使者としての新鮮な感覚を備えた青年の国際交流のために国家の予算を投入してこれを促進しました。日本では昭和40(1965)年に世界青少年交流協会が設立され、ドイツ、フランス、ハンガリーなどを初め世界各国との青年の交流が活発に展開されました。協会から派遣された青年たちは海外で異文化に接し強烈な印象を持って帰国し、次に海外からやってくる青年たちとの交流を積極的に進めるために昭和41(1966)年世界青年友の会を設立しました。以来、国際交流活動は飛躍的な拡大をし、全国29の都道府県で活発に展開されました。

◆主な活動内容と歴史

兵庫県世界青年友の会は、昭和43(1968)年6月16日に発足し来年平成30(2018)年には、創立50周年を迎えます。この間、多くの青年が活動し有為な社会人として巣立っていきました。

また多くの外国人青年に対して素晴らしい日本人と日本文化の紹介を行い、国際交流の実を挙げて来ました。ホームステイを通じて多くの県民に国際理解をしていただいたことも大きな成果です。

国の事業を利用する以外に海外渡航することが叶わなかった時代から廉価でいつでも誰でも海外旅行の出来る時代に変化し、各国が派遣する青少年代表団も極端に減少し、従来のパターンでの交流活動が困難となり新たな方向性を打ち出す岐路に立たされました。どんなに時代が変化しようとも本質としての国際交流は常に存在し、かつ重要であり、必ず継続されなければならないという信念のもと、小規模であってもより深い意義のある草の根的交流を進めることとし、現在はJICA研修員、兵庫インターナショナルハウスの留学生、在県外国人などとの交流プログラムを展開しています。今年平成29(2017)年は、六甲山ハイキング、第37回世界の料理会、第3回兵庫国際フォーラムなど兵庫県民と外国人との交流を行いました。

◆今後の取組

訪日・来日する外国人が急増し、国際交流の機会が日常化しているなかで相互の違いを認識しつつ、日本の文化と日本人のやさしさを紹介し伝える活動、日本人の国際意識の向上を図る活動を継続します。そのためには、若い人たちの入会を促し、同じ国際交流を行う他団体との連携、多世代を対象とした事業を推進します。



☆団体名：一般社団法人 神戸国際支縁機構

◆団体設立の目的と経緯

阪神・淡路大震災以降、傾聴ボランティアなどに携わってきました。任意団体として前身神戸国際支援機構は、9.11 テロが起きた平成 13(2001)年に産声をあげ、平成 13(2001)年 10 月 20 日に発足しました。超大国による空爆で被害を受けた無辜の民、孤児たち、戦争未亡人が涙している報道は、小さな親切から積極的なかわりに移行する契機になりました。安全と庇護を求めて日本に来る難民に対する対応は劣悪でした。茨木市の西日本入国管理センターで目の当たりにしました。「寄留者」temporary, dweller new-comer 難民、被差別部落、釜ヶ崎の路上生活者の人権も著しく損なわれていることもわかってきました。昭和 23(1948)年 12 月 10 日に謳われた「世界人権宣言」に基づいて、子ども達が教育、住居、福祉を得られていない人たちに「共感」する働きに、学生たちと取り組みが始まりました。地縁、血縁、同じ学び舎(や)の卒業生では救済できない貧者への責任へと点火しました。

◆主な活動内容と歴史

平成 23(2011)年、東日本大震災が発生すると宮城県石巻市渡波に向かい、被災者のこころの復旧、復興、再建のプログラムに仕えるようになります。過疎、高齢化、少子化の波で若者の都会への移住に拍車がかかりました。地元で若者たちが定着するように「田・山・湾の復活」を旗印に農・林・漁、沿道整備、傾聴ボランティアを繰り広げました。

自然災害に遭遇した孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者による痛み、苦しみ、怒り、くやしきの声に接しました。家族や近所にも秘めていた、てんでんこの際の地獄絵図を吐露されました。心の澱(おり)に触れた若者たちは価値観が変わりました。自分の生きざまを吟味し、タコ(他己)の精神へと覚醒したのです。海外の貧しい地域へも、「無償」「自主」「対話」性のボランティア精神で寝袋をもって出かけるようになりました。日本の若者が「縁の下のかもち」として、水、トイレ、宿のない被災地に行くようになりました。おカネが人生の最終目標ではないこと、「共生」、「共苦」、「苦縁」へと感情移入していきます。丹波水害、熊本地震、九州北部豪雨にもまっ先に「炊き出し」にかけつけました。「苦縁」なる「よすが」は”時間””金銭””仕事”の「ゆとり」とも無縁です。

海外で自然災害が発生するやいなや直行し、災現場の傾聴ボランティアを実施しました。孤児がいることを確認し、日本で救援金を集め、ネパールなどで孤児の家を建造しています。

◆今後の取組

東北ボランティアや、遠隔地への炊き出し、ドロ出し、がれき処理に向かうにも、ガソリン代、高速料金などの交通費を要します。自己負担でまかなってきました。しかし、観光庁の施策により、徴収することが違反行為という悪法により、ボランティア活動の息の根が止められようとしています。助成を国や大企業からもらわず、不特定の人々からの寄附でまかなっているグループにとり、大きな障壁となっています。ボランティア道はビジネスではないからです。

食料を海外からの輸入に頼っている日本は遅かれ早かれ、食糧難の危機に直面します。自産自消「自分で作って、自分で食べる(消費する)」の「田・山・湾の復活」を通じて、「耕支縁」の共生社会を実現したいですが、制度が立ちはだかっています。

「受縁力」のない人々が餓死することのない日本になるために、青少年活動は有益です。

☆団体名：特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫

◆団体設立の目的

子育ての孤立化や子どもの自尊感情の欠如、若者の社会力不足などの問題は、効率を優先し、結果を重視する社会体質が原因のひとつではないかと感じ、「体験プログラム＝あそび」のチカラを広く伝えることが必要だとの思いを持ちました。（1998年に前身団体活動開始）

「あそび」はテレビやインターネットなどの情報の一方通行ではなく、またその「結果」が重視されるのではなく、どんな気持ちや方法であそんだかという「過程」そのものが大切な要素であると捉え、「体験プログラム＝あそび」を通して多くの人と共感することが現代の社会問題の解決につながると考え、「やるならあそびにとことん価値をつけよう」と NPO 法人生涯学習サポート兵庫（SHOSAPO）を 2003 年に立ち上げました。

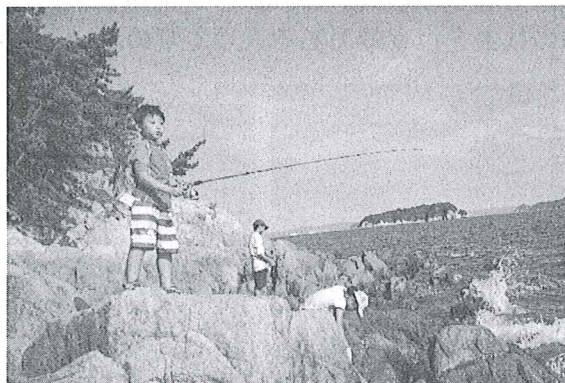
◆主な活動内容と歴史

団体設立後、現在まで続くプログラム「兵庫県徒歩縦断プログラム チャレンジウォーク」が、SHOSAPO スタートのプログラム。チャレンジウォークは、瀬戸内海と日本海に面した兵庫県を徒歩で縦断するというプログラムです。チャレンジャー（子ども）たちは、リアカーに自分の荷物を詰めて、8 日間歩き続け、ひたすらゴールを目指します。8 日間で 150km を歩くという大きな目的を達成するために、小さな目標を立て続けます。失敗や挫折を経験しながら、目標を一つひとつ達成していく喜びが子どもたちの生きるチカラを育んでいます。

◆今後の取組

立ち上げから 15 年。まだまだ試行錯誤の部分もありますし、挑戦し続ける団体でありたいと思っています。毎年新たな試みを各プログラムには加えるようにもしています。

設立当初は、子ども向けのキャンプを中心に活動を行っていましたが、キャンプで培った「あそび」の部分を抽出し応用させながら、いろんな世代の人々にその必要性を伝えるため、様々な対象に合ったプログラムの提供を行っています。また、キャンプなどのチラシを単なる広報用のチラシとして捉えず、「今子どもたちに必要なことを多くの人に啓発するためのツール」と考え、そのキャッチフレーズや印刷枚数、配布先にこだわり、より多くの人への啓発を目的としています。



☆団体名：一般社団法人いえしま自然体験協会

◆団体設立の目的と経緯

平成 24(2012)年 4 月 1 日より地域住民なども加わり、管理運営に主体的に参画する施設として、県立いえしま自然体験センター、その指定管理団体として、設立された。

一般社団法人いえしま自然体験協会の設置目的は、「海辺の自然体験活動に関する先導的・専門的事業を、行政・民間・地域の人々と協働して行い、子ども達や青少年達が、大自然の中で多様な体験活動を通して、自然を理解し、自然に親しみ、自然と共に生きることの大切さを学び、明日の社会の担い手として心身共に健やかに成長することを目的とする。」となっている。

◆主な活動内容と歴史 ～そして、今後に向けて～

いえしま自然体験センターの名称は、平成 19(2007)年 4 月 1 日に「母と子の島」から変更された。母と子の島は、昭和 57(1982)年 5 月 5 日に設置された。その背景は、昭和 54(1979)年の国際児童年を記念し、自然とのふれあいの中で、親と子が心身を鍛錬し、創造性を高めることにより、心の通い合った幸せな家庭作りに資することが必要であるということからである。現在も、いえしま自然体験センターに母と子の島の基本理念はそのまま受け継がれている。

また、多くの青少年達が、自らの手で活動の場を作り上げていった「青年の島、松島」の活動を抜きには、この施設の歴史を語ることはできない。

昭和 47(1972)年の年末に、「松島かわら版」が創刊され、自分たちの手で施設や環境設備を整えていった様子が細かく掲載をされている。多くの仲間と汗を流し、人生を語った青年達は今、社会で中核となり、活躍している者を多く見受けることができる。

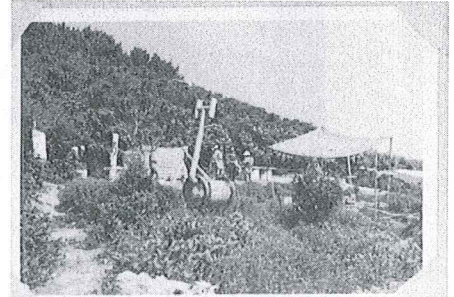
「いえしま自然体験協会」となってからも、当施設を利用される方々に、生き方や環境などを捉えて頂くために、様々なプログラムを提供している。さらに、組織の変遷はあったが、青年ボランティアが中心となって、年間 20 回以上の主催事業のプログラムを実施している。この青年達は、参加者の方々の発見や喜び・感動・疑問などを通してものの見方や考え方の変化を実感し、自分たちも成長していることに気づいている。また、そのことが活動の大きな励みともなっている。これからも地域と共に施設や活動を維持し、展開、発展させながら、明日の社会を担う魅力ある人づくりの思いを心に、取り組みを進めていきたい。



青年達と坂井知事との懇談(昭和48年)



井戸知事と いえしま自然体験センターオープニング(平成19年)



松島の様子(昭和52年)

【次世代につなぐ青少年活動】～これからの青少年団体活動の展開～

1. 社会の問題や課題に対応した青少年活動

青少年団体はその時々、社会の状況を踏まえて設立されてきました。戦後の荒廃した子どもを取り巻く環境の中、青少年団体の役割が求められ、活動に取り組みました。所得倍増政策下、働く青少年への対応としての活動を展開しました。戦後の少年非行の三つの波に基づいた取り組みも進めてきました。今、いわゆる子どもの貧困問題やコミュニケーション能力の低下、実体験の不足が言われ、また SNS の普及に伴う情報環境の変化などもあります。さらに、少子高齢化や、虐待や引きこもり青少年の増加など、青少年を取り巻く状況は、困難さを増しています。今後この状況に対し、積極的に対応した活動が求められます。団体は、活動の目標、課題を確認しつつ現状を評価、検証し、それらを生かして継続した活動に取り組む必要があります。そのためには、団体同士の情報共有を積極的に図り、団体の理念に基づいた特徴ある活動を展開しつつ、今日と将来を見据えた取り組みが、今後さらに求められます。

2. 指導者の質と量の拡充

多くの団体で、団体運営に携わる指導者の固定化が進んでいます。また、指導者の減少も顕著なものがあります。特に、多くの市町（地域）組織を持っている団体ほど、その傾向にあるようです。少年団体の場合、活動に子どもを参加させている親のニーズに応えるためには、指導者の確保は急務です。我々の実施した調査によれば、団体活動を体験した青少年は体験していない人より、職場や地域社会で多様な人々と仕事や活動をすすめていくために必要とされる、いわゆる「社会的基礎力」が、より身につけていることがわかりました。今後も社会の期待に応えるためには指導者の資質の向上が求められます。

指導者のスキルアップを図るためには、団体の枠を超えたトレーニングの機会や団体以外での体験の場が効果的で、そうした機会を持つことがさらに必要となるでしょう。

3. 人財の発掘、育成、活用

地域には、何らかの形で社会活動に参加したいと考える人は少なくありません。特に、男性シニア層がそうです。この層が如何に活動に興味を持って関わり、協力者として今後、継続的につながっていくかが大切になります。現役時代のキャリアや経験を生かした取り組みは必ず団体に必要な人財へと育つきっかけとなります。

調査では、青少年期に団体活動に参加し、関わった経験のある人はその後も団体と何らかのつながりや、関わる機会に決して消極的ではなく、時には協力者、支援者として活動している方が少なくありません。団体活動の未経験者に対し、もっと活動をアピールし、参加を促す興味、動機づけを工夫した取り組みを、日常的に行う必要があります。

4. 協議会としての優位性を活かす

青团連は現在 23 団体で構成され、団体はそれぞれ固有の理念を持って活動しています。団体の個性や持ち味を活かし、緩やかな連携を図りながら、今日の青少年の問題や課題に関わっていく必要があります。また、プログラムやリーダーシップのあり方や持ち方等についても相互に学習啓発出来る機会を持つことが可能ですし、貴重な機会となります。

また、現在行っている青少年本部や行政、教育委員会(地方教育事務所)との協議や懇談会の機会を活用し、青少年の現状を広く共有し、指導者としての視野を広げ、個々の団体の役割の確認や、協力の機会の模索、またアピールの機会とすることが出来ます。

5. 青少年団体の認知を広げるために

社会の混乱、変革期、貧しさ、豊かさ、成熟、そして新たな社会状況の中で、青少年団体が何を捉え、何を目指し、どのような活動を展開するのか、それらをきちんと地域や社会にアピールする手立てやその内容を常に意識することが必要です。青少年団体が実践する体験活動は、人としての基本的コミュニケーションやあるべき生活習慣に基づいたものです。その大切さや必要性、そして成果を発信するのです。青少年活動フェスティバルのような多くの市民と出会う機会や行政等の事業に積極的に参加し役割を担い、団体を外に向けてアピールすべきです。また、SNSの活用も欠かせません。新たなニーズを抱えるわれわれの対象者の多くにとって、それは発信、受信の日常ツールとなっています。SNSに関しては、新たな戦略が今後一層、求められていくことでしょう。

【年表でみる、兵庫の青少年団体のあゆみ】

年代	社会状況・世相や出来事	青少年関連・問題等	兵庫の青少年団体の活動
S20年 1945 以前			1886 神戸YMCA設立 1912 ボーイスカウト(BS)神戸第1隊発隊(外国) 1921 BS山手隊発隊(国内) 1923 BS須磨向上会ウルフ・カブ発隊
S20年 1945	8月 終戦		
S21年 1946	11月 第1回国民体育大会開催		神戸YMCA戦後初キャンプ実施
S22年 1947	4月 教育基本法制定 5月 日本国憲法施行	12月 児童福祉法公布	
S23年 1948	7月 オリンピック ロンドン大会	11月 教育委員会法公布 母子手帳の配布開始	8月 第1回BS講習会開催(神戸雲中小) 12月 ガールスカウト「リーダークラブ」発足
S24年 1949	11月 湯川秀樹ノーベル賞受章	6月 社会教育法公布 11月 国連児童権利宣言 県議会「青少年不良化防止」決議	5月 ガールスカウト日本連盟設立 12月 BS兵庫県連盟設立総会
S25年 1950	6月 朝鮮戦争勃発		YMCA余島キャンプ場開設 4月 BS兵庫県連盟結成式
S26年 1951	9月 日米安保条約調印	5月 児童憲章制定	8月 第1回BS合同野営大会(明石公園)
S27年 1952	6月 中央教育審議会発足	3月 第1回全国農村青少年クラブ実績 発表大会(農林省)	7月 県社協「子ども分科会」設置
S28年 1953		8月 青年学級振興法公布 9月 県青少年問題協議会発足	神戸YMCA、余島で日本初の「肢体 不自由児キャンプ」 11月 第1回カブラー開催(芦屋)BS
S29年 1954			
S30年 1955	9月 伊勢湾台風襲来	青少年団体活動促進:文部省通知	4月 BS兵庫県連盟→兵庫連盟に改称 9月 伊勢湾台風救援活動(YMCA) 神戸YMCA「日本語学校」開設
S31年 1956	5月 売春禁止法公布 7月 「もはや戦後でない」経済白書 12月 日本国、国際連合加盟		5月 兵庫県子供会連絡協議会発足 8月 第1回日本ジャポリーに参加(BS)
S32年 1957			3月 兵庫県ユースホステル協会設立 8月 第1回交換ユースラー雪彦山開催
S33年 1958	5月 第3回アジア競技大会東京開催 11月 新幹線運転開始 12月 東京70完成/1万円札発行	4月 兵庫県青少年愛護条例施行 6月 中教審勤労青少年教育の方策答申	4月 ユースホステルアジア協議会ラー開催
S34年 1959	4月 皇太子殿下ご成婚 4月 国民年金法公布	9月 国立中央青年の家開設	
S35年 1960	1月 日米新安保条約調印 9月 高度経済成長「所得倍増計画」発表	過酷な労働、少年非行の激増	8月 第1回全日本ユースラー宝塚開催 OAA活動開始(勤労青少年仲間作り)
S36年 1961	10月 大鵬、柏戸横綱昇進	子どもに睡眠薬遊び流行	11月 ガールスカウト兵庫県支部設立
S37年 1962	8月 堀江謙一太平洋単独横断	1月 第1回日米教育文化会議 校内暴力・教師への暴力増加	神戸YMCA「体育の嫌いな子供の キャンプ」実施

S38年 1963		青少年スポーツ活動促進(文省通知) 子どもの遊び場不足が深刻化	兵庫県スポーツ少年団設立
S39年 1964	4月 OECDに加盟 10月 東海道新幹線開通 10月 オリンピック 東京大会開催		
S40年 1965	2月 ベトナム戦争勃発 原宿族/赤い羽根共同募金開始 国際協力年	1月 「期待される人間像」発表 4月 国立オリンピック記念青少年総合センター 開館/若者の自殺増加	1月 第1回隊長会議(BS.兵庫公会堂) 4月 子ども会キャンプ大会開催
S41年 1966	3月 総人口1億人突破 「ビートルズ来日」 「おはなはん」 「フォークソングブーム」	4月 兵庫県民生部青少年対策室設置 青少年育成国民・県民・市町村民 会議誕生 日本キャンプ協会発足	3月 OAA財団法人化 3月 浜坂ユースホステル完成 5月 青少年団体代表者会議開催
S42年 1967	総人口1億人突破 「グループサウンズ」	4月 児童を事故から守る運動 「ヒッピー」	10月 兵庫県青少年団体連絡協議会発足
S43年 1968	10月 川端康成ノーベル賞受賞 国際人権年	1月 第1回総理府青年の船出発 4月 兵庫県青少年局設置 (兵庫県青少年本部スタート)	4月 OAAはりまハイツ開設 4月 青少年団体連絡協議会設立 6月 兵庫県世界青年友の会設立
S44年 1969	1月 東大安田講堂事件 7月 アポロ11号月面着陸	5月 第1回日本都市青年会議 国立淡路青年の家開設	
S45年 1970	3月 大阪万博開催 8月 東京で歩行者天国 国際教育年	5月 勤労青少年福祉法施行 10月 公害対策県民会議発足	神戸YMCA 沼島キャンプ場開設
S46年 1971	環境庁発足 人種差別と闘う国際年 「ディスカバーJapan」	6月 兵庫県青年の島・山実行委員会 8月 第1回全国学校キャンプ指導者講習 9月 第1回県青年洋上大学	8月 第13回世界ジャンボリー参加(朝霧)
S47年 1972	2月 札幌冬季オリンピック開催 3月 山陽新幹線岡山開通 5月 沖縄本土復帰(沖縄県発足)	4月 沖縄友愛の船 8月 兵庫県戸隠青少年交歓キャンプ	5月 兵庫県青年洋上大学同窓会設立
S48年 1973	オイルショック	子どもの遊び場確保(文部省通知)	
S49年 1974	高校進学率90%時代へ 6月 自然保護憲章制度 「アルプスの少女ハイジ」	9月 第1回県農業青年フェスティバル	
S50年 1975	4月 ベトナム戦争終結 7月 沖縄海洋博開催 国際婦人年 「超能力」 「およげタイヤキくん」	5月 キャンプ指導者資格認定制度開始 11月 CSR事業スタート	4月 BS兵庫連盟25周年記念大会
S51年 1976	2月 ロッキード疑獄事件 「フィールドアスレチック/ディスコ」 5月 植村直己北極圏単独横断	7月 学校体育施設開放事業推進(通知) 第1回兵庫県若人の祭典	
S52年 1977	8月 有珠山噴火 「カラオケ」 「宇宙戦艦ヤマト」	8月 ゆとり教育の強調 青年の島ワークキャンプ 各県民局に地方青少年本部設置	
S53年 1978	5月 成田空港開港 8月 日中平和友好条約締結 「ピンクレディー」 日本長寿世界一	1月 全国野外活動団体協議会結成 9月 はたちの勤労勤労青年特別研修	3月 子ども会海外交流少年の翼実施 6月 BS第1回インダバ(隊長のつどい)開催
S54年 1979	第二次オイルショック 国立大共通1次試験開始 国際児童年	7月 嬉野台生涯教育センター開所	2月 全国子ども会中央会議開催・洲本
S55年 1980	7月 オリンピック モスクワ大会 (日本不参加)	第1回近畿青年洋上大学実施	
S56年 1981	国際障害者年 4月 スペースシャトル初飛行		4月 兵庫県緑の少年団連盟設立 8月 第9回BS合同野営大会(青野ヶ原) スポーツ少年団第1回大会(剣道)

S57年 1982	5月 国際環境会議(ナイロビ宣言) 「ひょうきん族」	5月「母と子の島」設立	
S58年 1983	国際コミュニケーション年 11月 レーガン大統領来日 「おしん」放送開始	任天堂ファミコン発売 第1回勤労青年洋上大学実施	9月 全国ユースホステル研究集会神戸 11月 県子連30周年記念大会開催
S59年 1984			3月 子ども国際平和会議 5月 子ども自然村建設開始
S60年 1985	国際青年年 8月 日航ジャンボ機墜落 「阪神日本一/新人類」	いじめ社会問題化 警察庁「いじめ白書」発表	
S61年 1986	4月 チェルノブイリ原発事故 4月 男女雇用機会均等法施行 11月 三原山大噴火		神戸YMCA 創立100周年 4月 ビーバースカウト活動開始(BS)
S62年 1987	4月 JRグループ発足 バブル経済本格化 携帯電話サービス開始		
S63年 1988	3月 東京ドーム完成 9月 オリンピック ソウル大会 「ドラゴンクエストブーム」	兵庫県、自然学校開始 5泊6日(H21より4泊5日)	
H 1年 1989	1月 昭和天皇崩御 4月 消費税(3%)スタート 11月 ベルリンの壁崩壊		10月 第1回ビーバーまつり(明石公園.BS)
H 2年 1990	1月 大学入試センター試験導入 6月 礼宮・紀子様ご成婚	子どもの権利条約署名	
H 3年 1991	1月 湾岸戦争勃発 3月 東京都庁新庁舎 12月 ソビエト連邦解体 「きんさん・ぎんさん」		県スポーツ少年団総合競技大会 5月 BS日本連盟全国会議(神戸開催)
H 4年 1992	国際宇宙年 バブル崩壊 7月 オリンピック バルセロナ大会 「若・貴時代」	知恵遅れ「知的障害」の表示へ 育児休業法施行 小・中学校週休2日制試行 少子化	
H 5年 1993	6月 皇太子ご成婚 サッカーJリーグ開幕 青色LED実用化 「ヤンママ」		
H 6年 1994	6月 松本サリン事件 9月 関西国際空港開港 国際家族年 12月 プレイステーション発売		4月 神戸YMCA国内初のLDプログラムスタート
H 7年 1995	1月 阪神・淡路大震災 3月 地下鉄サリン事件 PHS発売開始	4月 公立学校第2.4土曜休	1月 阪神淡路大震災救援・復興活動
H 8年 1996	7月 アトランタ五輪 英国狂牛病騒動 メークドラマ 小選挙区比例代表並立制初選挙	高校野球女子マネ、ベンチ入り容認	
H 9年 1997	4月 消費税5% 7月 英国領「香港」中国返還 8月 ダイアナ王妃死去 11月 山一証券・拓銀倒産	神戸児童連続殺傷事件	8月 BSO-パーム-ト'97開催(兔和野高原)
H 10年 1998	2月 長野五輪 4月 明石海峡大橋開通 6月 サッカーW杯仏大会初出場 7月 和歌山毒入りカレー事件	中学2年トライやるウィーク開始	8月 BS「西宮船坂野営場」起工集会 まなびピア兵庫開催(兵庫県モロゾー)
H 11年 1999	1月 欧州統合「ユーロ」誕生 1月 携帯(インターネット・Eメール)開始 国際高齢者年		6月 全国子ども会リーダートレーニングキャンプ スポーツ少年団全国競技別大会 兵庫県モロゾー青少年団体連絡協議会発足

H 12年 2000	4月 介護保険制度スタート 9月 シドニー五輪・高橋尚子金メダル		9月 BS「龍野菖蒲谷野営場」開設
H 13年 2001	3月 USJ開業 6月 池田小学校事件 9月 米国同時多発テロ 9月 TDS開業 国際ボランティア年	学校教育、社会教育における体験活動の促進(文科省通知) 中央省庁再編	10月 「神戸国際支援機構」発足 11月 BS「障がい児スカウティング指導者セミナー」開催
H 14年 2002	5月 サッカーW杯日韓共催 10月 北朝鮮拉致被害者帰国 10月 小柴・田中氏ノーベル賞受賞	4月 公立学校完全週五日制スタート ゆとり教育開始(～2010)	6月 子ども会第2次中期計画策定
H 15年 2003	3月 イラク戦争 感染症SARS世界的流行		5月 子ども会50周年記念大会開催 8月 BS「ベンチャー・エキスポ」開催(母と子の島)
H 16年 2004	8月 オリンピック アテネ大会 10月 新潟県中越地震 11月 新紙幣(千、五千、万)発行 鳥インフルエンザ オレオレ詐欺		1月 BS第6代連盟長に井戸知事推戴 2月 全国子ども会育成中央大会・宝塚 8月 第15回BS合同野営大会(播磨科学公園都市)
H 17年 2005	3月 愛知万博開催 4月 JR宝塚線脱線事故 小泉劇場		7月 BS海外派遣「米国フィルモント派遣」
H 18年 2006	1月 ライプツァ事件 2月 トリノ五輪・荒川金メダル 耐震強度偽装問題	出生率、過去最低の1.26	7月 マザー・テレサ映画上映(支援機構) 9月 兵庫国体開会式奉仕(BS) 10月 のじぎく兵庫大会開会式奉仕(BS)
H 19年 2007	食品偽装事件 3月 能登半島沖地震 10月 郵政民営化	3月 「放課後子どもプラン」の推進通知	3月 ユースホステル創立50周年のつどい 4月 「母と子の島」から「いえしま自然体験センター」に名称変更
H 20年 2008	8月 オリンピック 北京大会 9月 リーマンショック		5月 BS日本連盟全国大会開催(神戸) 7月 BS第10回日本アゲナリー(しあわせの村) 8月 第16回BS合同野営大会(淡路島公園)
H 21年 2009	1月 オバマ大統領就任 9月 政権交代 事業仕分け 「草食系男子」		8月 BS「ベンチャーひょうご2009」(いえしま)
H 22年 2010	猛暑で熱中症死者相次ぐ 尖閣諸島問題浮上 「AKB48」 「ツイッター」		
H 23年 2011	3月 東日本大震災 7月 なでしこジャパンW杯優勝 日本総人口初の減	第1回青年洋上大学海外養成塾	神戸YMCA公益財団法人化 3月 第1次東北ボランティア派遣(支援機構) 9月 一般社団法人 神戸国際支援機構法人化
H 24年 2012	5月 東京スカイツリー開業 7月 オリンピック ロンドン大会		4月 一般社団法人カールスカウト兵庫県連盟法人化
H 25年 2013	5月 三浦雄一郎80歳エベレスト登頂 6月 富士山、世界文化遺産登録 8月 イチロー日米通算4000本安打		
H 26年 2014	9月 御嶽山噴火 10月 ノーベル物理学賞三氏受賞		
H 27年 2015	10月 マイナンバー制度制定 12月 ノーベル賞(大村氏、梶田氏)受賞 「爆買い」		
H 28年 2016	4月 熊本地震 8月 ブラジル、リオ五輪開催 平均寿命(男80.98歳、女87.14歳)	選挙権18歳以上に改正	
H 29年 2017	1月 米大統領トランプ氏就任 6月 最年少棋士藤井聡太四段29連勝 11月 北朝鮮弾道ミサイル発射		神戸YMCA三宮会館竣工 5月 ネパール孤児施設開所(支援機構) 7月 第1次九州北部ボランティア派遣(支援機構)

※年表の社会状況の年月は WEB データ(特に Wikipedia)を参照

◆ 委員会日誌

【ヒアリング】2017年10月17日（火）16:00～ 於：県民会館7階会議室

□ゲスト：鎌方志郎 氏

〈ご紹介〉1966年（昭和41年）に兵庫県民生部青少年対策室が設置された。翌年に兵庫県青少年団体連絡協議会（以下＝青团連）が発足、1968年（昭和43年）には兵庫県青少年局が開設され、兵庫県青少年本部がスタート、青团連も当年度から協議会としての活動を始めた。

氏は当時、青少年局担当、後に「県立母と子の島」（現在、いえしま自然体験センター）の開設に携わり、初代島長に就任。また兵庫県青少年本部の財団法人移行期の担当も歴任された。厳しくご指導も戴いたが、青少年また青少年団体への関心ご理解には、とても深いものがある。

〈鎌方氏のお話〉～要点～

- 自分は、神戸生まれ神戸育ち、神戸空襲も経験した。当時中学生、但馬で半疎開もした。この疎開先での百姓の体験も含めた田舎生活が大きな経験で、後の仕事や生活に役に立つ体験だった。昭和22年、三重の水産専門学校に1期生入学。海や魚のこと、調理について学習した。昭和25年、県庁入職、水産部に配属。朝早くから中央市場に通い、昼からは明石の水産試験場で検査方法を勉強した。おかげで検査に自信がつき、高い知識も身に着いた。その後、漁業権などを扱う仕事、さらに消費生活課でも仕事をこなした。
- 昭和45年青少年局に配属。青少年非行が問題の当時、教育委員会や警察からも職員が派遣され、若者の非行化防止が主な業務の部署だった。当時、プログラムといえば野外活動ぐらいしかなく、初めての仕事は青少年を引率しての戸隠キャンプだったが、上から青少年を指導する感じで、面白くなさを感じ、もっと青少年を遊ばせることを意識するようになった。当時は課のスタッフと外部の青年たちが親しい間柄という感じではなく、課の中も寄り合いで、コミュニケーションがうまく機能していなかった。当時の金井知事が、青年たちが気楽に出入りできる場所を、ということで旧の自治研修所（木造で庭付、古くてもなかなか雰囲気のある建物）の提供を受け、青团連のメンバーとそこで花見や交流の機会を持ち、団体どうしのきづなや青年たちとの交流が育まれていった。
- 昭和45年、青少年育成に熱心な坂井知事が就任。「青年の島」構想が指示された。声をかけたらYMCA、ガールスカウト、ボーイスカウト、OAA等からリーダーが集まってくれた。家島諸島の松島等、物件を探し回り、決めた後は段取り相談、水やトイレの確保や設置の検討。一から一緒に始めることで団体との絆が強くなった。自分も青少年育成に関わることで仲間が増えた。無人島での助け合わなければ生きられない生活で、たくさんのカップルも生まれた。いいところも悪いところも見えて、かえって絆が深まったのではないかな。
- 行政、教育委員会、警察が一つになって青少年育成ができるようにと青少年局が生まれ、青少年局と民間がうまくいくようにと青少年本部が生まれた。それをまとめる行政の職員が「まじめ」すぎて堅苦しくなっていたような気がする。もっとあそびが要るのではないかな。仕事とは考えず、仲間づくりが皆で出来たらいいのではないかなと思う。
- 坂井知事の4期目、「母と子の島」を作る話が出た。漁業権の問題など、地域や地元との調整にかなりの困難やハードルがあったが、当時の貝原副知事の強い後押しもあり、またそれまでの経験や人脈を駆使、なんとか交渉を進め、開設に至った。当時のYMCA 今井総主事（当時青团連会長）からの推薦もあり、昭和55年、51歳になったところで開設時の島長に就いた。

- 「母と子の島」が半分くらい完成した頃になって、青少年本部を法人化し、島の運営を任すように知事から要請指示が下りた。普通なら1年にかかる法人化も短期間でできた。法人化するにあたって、基本財産が必要になった。そこで青少年団体に寄付していただいて基本財産をつくることになった。この仕事はなかなか大変な作業で、理解を得るには大きな苦労があったが何とかやり遂げた。こうして設立させたのだから、青少年本部は青少年団体が主導して運営する団体であるという認識で仕事をしていた。
- 色々なことで頭を悩ませた頃があつて、関西ヨット連盟副会長をしていた当時、大阪開港 120 周年記念事業ということで、ヨットレースに出たいという思いもあり、貝原知事に辞めさせてほしいと直訴した。57 歳だった。そしてメルボルン～大阪のヨットレースに出場。レースから帰ると滞っていた予算が付くなど、状況が好転していく事になった。
- 青少年本部は本部が運営するのではなく、青少年団体が主になって運営できるように作ってきたつもりである。そこが県庁出張所になってしまわないように、本部や行政が動くのではなく、青少年団体の意思が反映しての青少年本部の運営になってほしいと思う。
- 「青年洋上大学海外養成塾」をやっているが、観光中心の交流では意味がない。これも、小さな帆船などで1週間旅行する、お互いが限られたスペースの中でお互いを意識し、世話する方、される方が仲良くなるということが大事なのであって、必ずしもわざわざ海外に行く必要もないと思うし、仲間作りもそこから生まれるのではないか。
- 一番大事な時に、自分は青少年本部の仕事を放り出した気持でいる。何かお手伝いできることはないかと今、考えたりしている。自分はYMCAで育てられたと思っている。家島の施設も、キャンプのことを本当に分かって運営してほしいと思うし、目指すものを明らかにし、職員とリーダーの協力の質をもっと高めていって欲しいと思う。
- 最近、人間（青少年）がおかしくなっている、と感じる出来事が多い。少しでもそうしたことがなくなるよう、行政と団体が一蓮托生、心をつなげて育成活動を盛り上げてほしいと願っている。



鋤方氏を囲んで

◆ 委員会日誌

【ヒアリング】2017年12月12日 16:00～ 於：交流プラザセミナー室

口ゲスト：元兵庫県連合青年団役員 向井祥隆氏

〈ご紹介〉昭和48年(1973)、城東町(現在は篠山市)の青年団の団長を務めた後、兵庫県連合青年団の常務理事、事務局長を経て、昭和52年(1977)、県連合青年団副団長に就任。そののち、地元篠山の社会教育関係の活動、仕事に広く携わり、たんば田園交響ホール開設時は、チーフ・プロデューサーとして活躍。現在は、NPO 法人いぬいふくし村理事長、篠山市社会福祉協議会理事、篠山国際理解センター代表理事、篠山市ボランティア連絡協議会会長等を務める。

〔向井氏のお話し〕 ～要点～

子どもの頃、地元篠山城東地区子ども会で、青年団指導者にキャンプ指導を受けた経験がこうした活動の出発点。自分の将来のイメージも重なった。昭和40年代には、自身も青年団に、後に県の連合青年団にも関わり役員に。世代間交流を進め、地域貢献を持続的に果たすという考えのもと活動を展開、その頃の仲間とは今もつながっている。

今は青年団としての活動や組織体はほぼ無くなりかけており、若い人たちは消防団、PTA等で地域とつながり、地区のまちづくり協議会で活動している現状があるくらい。地域で若い人たちの関わりや集まりがもっと出来たらいいのと思う。OBが支援したらとも思うが、上から(目線)では難しい。若い時に地域と関わることは大切で、今日では地縁の無い生き方が主流となっているようだ。

田園交響ホール開設を担当したが、募集スタッフには若い人がたくさん集まった。神事やお祭りがあると、それなりに活動は廃れないが、音楽や芸術で人、特に若い人が集まることはとても貴重。音楽祭を企画中だが、多様な年代から100組位の参加応募の反応があり、若い人も多い。若い人ばかりの集まりというのも課題はあるように思うが、一方で80歳近くでまだ頑張っている人がいる。若い頃から頑張り続けているということだが、バトンタッチしてないということでもあり、これも気になるところ。

人は自分の10年、20年先の姿がそこに見えればきっと頑張れるはず。最近、特に自然災害関係の出来事が多く、地域への関心はそれなりに高くはなっている。退職後、後の生き方らし方を考えると、今は以前よりもっと地域の将来や暮らしにもっと関心を持たなければならないと思う。その時になって急に何かするといっても間に合わない。地域でも組織や団体でも、世代間交流が出来ているところは、それなりに活性していると思う。

いろんな人や地域との関わりを経験しておいたら、きっと役に立つ時が来ると思う。

◆ 委員会日誌

【ヒアリング】2017年11月27日（月）16:30～ 於：交流プラザセミナー室

□ゲスト：元兵庫県農業青年クラブ会長 中 則 夫 氏

元兵庫県少林寺拳法連盟代表者 中山満洲雄 氏 両氏とも青団連第一期の幹事

〔中 氏のお話し〕 ～要点～

32年前、農業青年団の会長をしていた時、兵庫県からの案内で初めて青団連の会合に顔を出したのが始まり。色々な人との出会いで磨かれていくという実感も持て、来て良かった思いが強い。当時、農業は時代的にはマイナーな職業と言われかけ、負のイメージも強く、大学出て農業するのはもったいない、といわれる時代でもあった。

人を元気にするにはどうすれば、という活動が青団連だった。この会で初めて農業を認められたという意識もあった。皆協力的で興味を示してもらえたし、情報の少ない時代に、自分自身が多様な体験ができる場所を得たのは大きかった。さらに、それまで吸収する一方の自分が、YMCAを通じ、タイ人の農業体験実習者の指導をする機会を得、農業をフィードバックできる機会をもらえた。今では農業青年は大学出も多く、慎重な人や高校出のフットワークの軽い人もあり、そのマッチングがうまく出来たらと思う。農業もきちんとマネジメントできないと、うまく経営できない状況になってきている。人は刺激を受けて初めて成長する。若い農業従事者にも機会や刺激を与え、育ってくれればと指導している。

4Hクラブ、兵庫県で多い時は800を超える単位クラブがあったが、制度も変わりどんどん減少した。また、広域流通が一般的になり、例えば橋で四国と繋がるようになると、それは却って地産地消の機運を生んだりした。三田も人口減が著しいが、鉄腕ダッシュを見て農業に興味を示す人が増えたり、定年後に農業をという希望者も増えているのは、今日の状況かな。

〔中山 氏のお話し〕 ～要点～

少林寺拳法の一連の練習では講話を必ず入れなければならず、指導者の関門でもあり、その勉強で、青少年活動や青団連との関わりが始まった気がする。青少年活動では、社会に役立つ人間になれというのを教わった。自分の仕事で組合に関わる機会もあり、指導者としてあらゆる人を指導する立場にあって、青少年育成の必要性を感じ加入した。人との関わり方やその実行力、信念を持って行動する人間をめざして少林寺拳法を体験し、青少年育成の基盤ができたのではないかと考えている。こんな活動ができていたのは兵庫県連盟だけではないかと思う。指導者を目指す気持ちになって初めて、育成の必要性を感じるのではないか。若い時はとかく技を身に着けた一心が優先しがちで、行き詰まりも早く、指導者がなかなか育ちにくい。そうした背景が「武道団体」という以上に「社会教育団体」と認知されたい思いになり、青団連加盟のきっかけになったのではないかと思う。

しつけや基本がきちんとできていない家庭が随分多くなった。学校教育に武道が組み込まれたが柔道剣道が主で、少林寺はなかなか入れてもらえない残念な状況はある。少林寺は仕事を持つ人でないと指導者にはなれない（武道指導を専業化できない）規則があるため、かえって忙しく、なかなか青団連の場に参加できる人がいなくなっている現状である。

2017 年度 兵庫県青少年団体連絡協議会 研究委員会開催経過

No.	開催日	会 場	主内容
1	2017 年 8 月 14 日(月)	青少年交流プラザ セミナー室	第一回全体委員会（運営委員会） 研究概要の確認 各小委員会の編成
2	2017 年 8 月 31 日～11 月 21 日 (延べ 11 回)	交流プラザセミナー室 神戸 YMCA 会議室 OAA 事務局 等	4 チーム（担当年代・時代）に分か れ各小委員会にてテーマ研究
3	2017 年 10 月 17 日(火)	県民会館 7 階会議室	鋤方志郎氏ヒアリング
4	2017 年 11 月 17 日(日)	交流プラザセミナー室	中山氏、中氏ヒアリング
5	2017 年 12 月 14 日(木)	交流プラザセミナー室	向井氏 ヒアリング
6	2017 年 12 月 20 日(木)	交流プラザセミナー室	第二回全体委員会 各小委員会の経過報告、課題確認
7	2018 年 1 月 22 日(月)	交流プラザセミナー室	第三回全体委員会 今後の展開、研究報告のまとめ方
8	2017 年 3 月 1 日(木)～2 日(金)	OAA はりまハイツ (加古川市)	第四回（宿泊）委員会 研究とりまとめ 報告書作成内容検討
9	2017 年 11/30 2018 年 2/6 3/16(3 回)	交流プラザセミナー室 兵庫県レク協会事務局	小委員会委員長会議 経過確認、とりまとめ検討 (その他、随時編集担当者会議)

【これまで青团連が実施した 調査研究活動】

◇2012年度（平成24年）

『 子どもの頃の体験が大人になって、どのような影響を及ぼすか、
に関する調査 ～未来へはばたく子どもたちのために～ 』

◇2013年度（平成25年）

『 青少年団体活動に関する親の意識調査
～団体活動のこれからに向けて～ 』

◇2014年度（平成26年）

『 県内企業・事業所の青少年の健全育成に関する意識調査
～求められる青少年活動のこれから～ 』

◇2015年度（平成27年）

『 青少年活動がもたらすもの ～リーダー体験者に聞く～ 』

◇2016年度（平成28年）

『 子どもの手さばき等の調査
～求められる、そして効果的な体験活動の展開に向けて～ 』

【2017年度 兵庫県青少年団体連絡協議会 研究室委員】（順不同・敬称略）

山口 徹	（公財）神戸YMCA 名誉主事	（兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問）
速水順一郎	（一財）いえしま自然体験協会 理事	（ 〃 会長）
清水 勲夫	（一財）OAA（野外活動協会）専務理事	（ 〃 副会長）
岡本 光司	兵庫県世界青年友の会 会長	（ 〃 副会長）
井上 真二	（公財）神戸YMCA 総主事	（ 〃 監 事）
南 秀生	日本ボーイスカウト兵庫連盟 副理事長	（ 〃 監 事）
西谷 成子	（一社）ガールスカウト兵庫県連盟 連盟長	（ 〃 運営委員）
植田 和彦	日本ボーイスカウト兵庫連盟 事務局長	（ 〃 運営委員）
柴田 光啓	（一社）兵庫県子ども会連合会 事務局長	（ 〃 運営委員）
西本 玲子	（公財）神戸YWCA 総幹事	（ 〃 運営委員）
大家 重明	兵庫県青年洋上大学同窓会 会長	（ 〃 運営委員）
前田 道亮	兵庫県モダン青少年団体連絡協議会 代表幹事	（ 〃 運営委員）
岩村 義雄	（一社）神戸国際支縁機構 理事長	（ 〃 運営委員）
山崎 清治	特定非営利活動法人生涯学習センター兵庫 理事長	（ 〃 運営委員）
萩本 義郎	（一社）いえしま自然体験協会 業務執行 理事	（ 〃 運営委員）
坂本 好也	（公財）兵庫県青少年本部 業務執行理事	

兵庫県青少年団体連絡協議会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通4丁目16-3

兵庫県民会館8階

公益財団法人 兵庫県青少年本部 活動支援部 内

☎078-(891)7410

